鄉土叢書第六輯

津輕蘭學の始祖
種痘普及の思人

佐々木元俊先生

洋学文庫
文庫8
F 22
22

仁術こゝ師

習中こゝ雄

鶴影

鄉土叢書 第六輯

特製

津輕文化協會推薦圖書

津輕蘭學の始祖
種痘普及の恩人

佐々木元俊先生

竹内運平氏口述

大日本同志會 青森縣支部刊行

贈呈

自序

一、此の春大日本同志會青森縣支部からの御依頼を受け、小閑を利用しつゝ此の小著をものした。

一、不備不足の點多々あることを充分承知しながらも此度はこの程度に止むることゝする。

一、なほ大方の御示教を待つて、益々先生の功績を世に顯彰したい事は著者の念願である。

昭和十七年七月

竹内運平

目次

表題揮毫……鳴海定五郎翁
題字……北海道帝國大學總長醫學博士　今裕氏

一、先生由緒之地　一
（一）元俊先生と九十九森　三
（二）元俊先生と羯南翁

二、先生江戸に上る　四
（一）杉田成卿の門に入る　五
（二）麻布町に醫を開業す　七
（三）數々の書を公にす　八
（四）蕃所調所出役を命ぜらる

三、先生故郷に歸る　九
（一）御國下りを命ぜらる　一〇
（二）蘭學堂教授となる　一二
（三）種痘の普及を計る　一六
（四）厚生福利の道を講ず　一八
（五）公立病院を興す

四、先生の生立と一族知己　一九
（一）先生の生立

(二) 先生の兄弟一族……二〇
(三) 先生と杉田家……二三
(四) 先生の交友知己……二五
(五) 先生の遺跡遺物……二六
(六) 先生の風貌性格……二七

五、先生に對する感謝と崇敬

(一) 先生の立志苦學……二九
(二) 先生の二大功績……三一
(三) 先生の奉公精神……三四

附錄篇

第一 津輕藩洋學の濫觴……三八
第二 津輕藩種痘の起原……四二
第三 補遺並に雜記……四三

口繪目次

(一) 佐々木元俊先生眞像
(二) 先生の住宅と其位置
(三) 先生の墓石と海舟翁の筆
(四) 蕃語胥象
(五) 仰松亭記と追悼詩
(六) 杉田玄端書簡と鏡と玉
(七) 舍密開宗

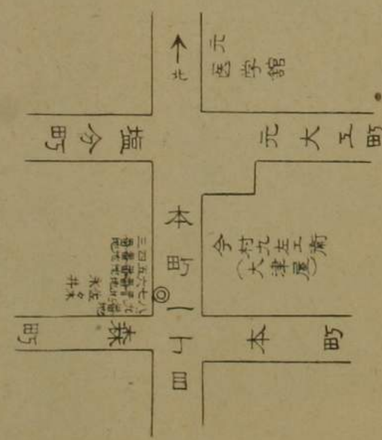
佐々木元俊先生眞像

佐々木元俊先生眞像

先生の嗣子故佐々木信美の所藏せるもので、此圖は佐々木五三郎氏の右寫眞を複寫所藏せるものに係る。寫せる時の年月不明である。

先生の住宅と其位置

（一）住　宅



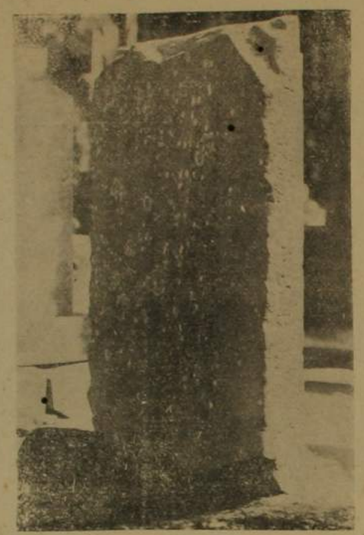
（二）位　置

明治四年ノ地圖ニ據リ作製

（一）明治七年の建築で、弘前最初の西洋造りである。先生はこゝで藥種業をも營んで居たのである。

（二）先生の當時の住宅位置で、この圖は明治四年のものであるが（一）の建物も、もと此處に建てられたものである。

先生の墓石



(二)墓石の裏面

(一)墓石の表面

(三)海舟翁の眞筆

(一) 先生の墓石の表面で、この文字は勝海舟の書である。墓はもと九十九圖にありしを偕行社の出來たるため菩提所寶泉院に移せるものである。

(二) 同裏面で陸羯南翁の文である。

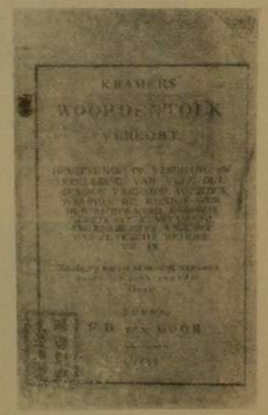
(三) 墓石に模刻せざる海舟翁の眞筆である。

蕃語象胥

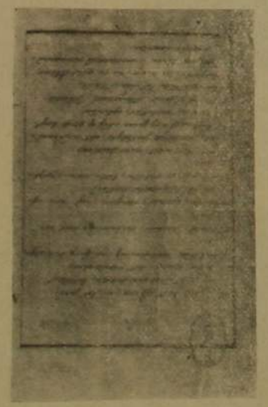
（一）表面

（二）

（三）



（四）



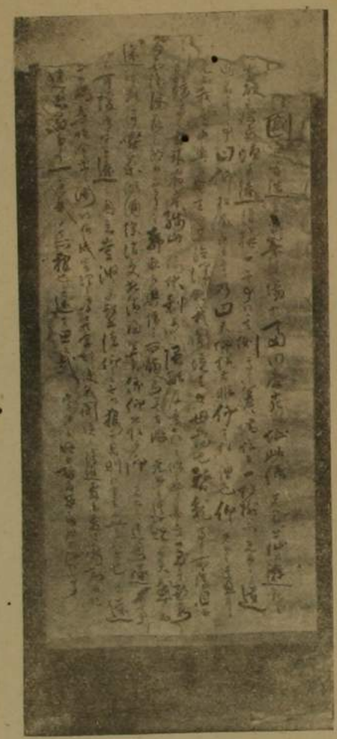
（一）先生の公判せる蕃語象胥の表紙
（二）同見返し
（三）首頁
（四）本文第一頁

弘前高等學校所藏

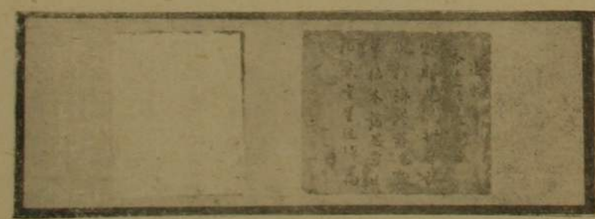
仰松亭記と追悼詩

（一）先生の友人兼松石居翁が先生の囑に應じて作れる文並に手蹟である。

（二）先生の友人今幹齋翁の先生追悼の詩である。



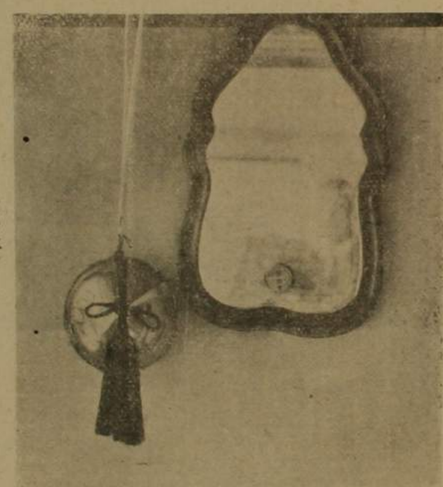
（一）仰松亭記



（二）幹齋の詩

（一）杉田玄端書簡　（佐々木五三郎氏所藏）

（二）鏡と玉

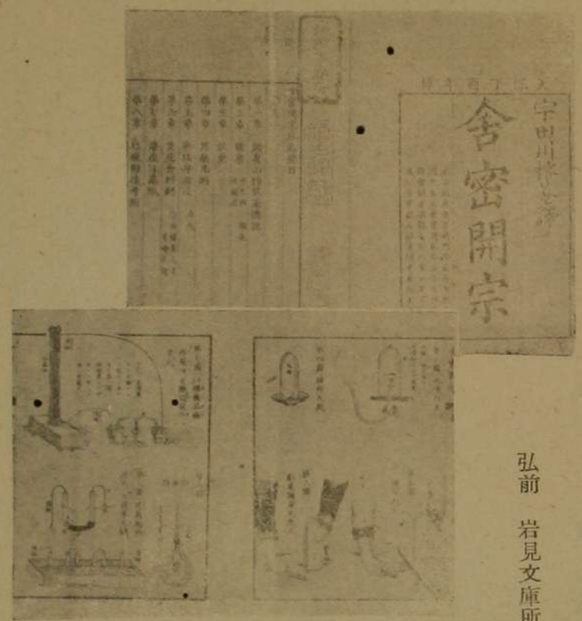


（同上）

（一）杉田玄端より先生に送られる書簡で先生の愛弟に小山内玄洋遊學の事其他舍密研究に關する色々な事を記載して居る。

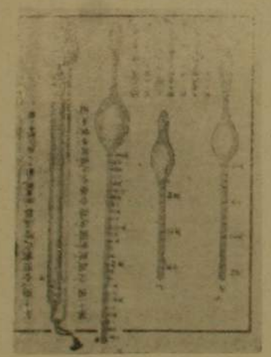
（二）和蘭製の鏡と飾玉である。前者は縦一尺九寸横（中央の廣い部分、ふち共）一尺一寸七分枠は日本製である。後者はギヤマンの飾玉で周圍一尺二寸銀色のもので房は赤色の日本製絹糸である。共に先生の遺愛品である。

舍密開宗

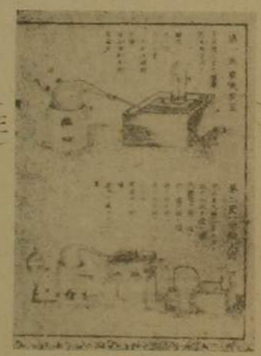


弘前　岩見文庫所藏

（一）



（二）



（三）

「舍密開宗」は宇田川榕庵の著であるが、先生はこれを熟讀して居たらしい、人々はこの書を携へて來てよく質疑を先生に質したさうである。なほ（一）の中にある藩學校「弘前學問所」「稽古館」の藏印に留意を希む。

津輕蘭學の始祖
種痘普及の恩人

佐々木元俊先生

一、先生由緒之地

（一）元俊先生と九十九森

弘前城南の一隅に俗稱九十九森と稱する名勝地がある。もと津輕寧親公の別墅であつた處で、大小數十の築山の間には迂曲する流と、數奇を凝らした池とがあつた。今は僅に其面影を弘前偕行社の庭園内に止めて居るのであるが、偕行社の設立前迄はほゞ昔の風致を殘し、小松の綠、芝生の原もまことに瀟洒たるものがあつた。著者もまだ學校にも行かない幼い頃、佐々木の伯母（註一）に連れられて當時此の地に住める中田家を訪れた事もあつたが、小山の間をかけ廻つた面白さは、今もなほ微かに浮ばれて來る。

さて九十九森の總域は甚だ廣い。其全部に亘るか否かは不明であるが、維新後此の地は元俊先生の所有地となつて居た。そこには寧親公遺愛の松があつた。先生もまた此の松を愛好し、側の亭を仰松亭と名づけ折々友を招いで樂を共にした。藩儒兼松石居翁は其最も親しき知己の一人であつた。森林助氏著述の「石居先生傳」に

明治二年七月九日石居は元俊の仰松亭（九十九森趾）を訪問した。同亭で函館の人横山某に邂逅した。某自ら寫す所の函館港内の眞圖を携へて來て見せられた。山林、人家、船舶歷々見るべしと隨筆に書いて居る。

と記し、其の狀況を彷彿せしめて居る。また同書に

翌三年五月先生また元俊の仰松亭に至る、この地はもと寧親公別莊の有つた所だ、公遺愛の松がある、依つて仰松亭と名づけたのである。

と、また石居翁は元俊先生に賴まれて、仰松亭記（註二）を作つた。石居の文東堂の書と世に並び稱せられたる、石居翁の作としても、また留意せられなくてはならない。

由來先生の本宅は本町一丁目にあるのであるが、九十九森に精練場を設け、從つて事務所も造り、小座敷も設けて居た。折に觸れては附近の仰松亭に小憩して心氣を養つたものであらう。明治七年十二月病歿の以前、其年の五月頃既に重體である樣子であるが、十二月十六日を以て終に富田紙漉町の弟新藏宅で瞑目した。而して先生の遺言により先生の心血を注げる精練場の所在地、即ち愛好せる仰松亭の近くに神葬を以て埋葬したが、明治二十七年其處に立派なる墓表が建てられた。表面は「香遠先生佐々木元俊墓」と書し勝海舟の筆になるもので、裏面には陸羯南の作になる墓誌が刻せられて居る。即ち其文は

文政元年生于弘前歳及三十一赴江戸從杉田成卿修蘭學嘉安之際藩醫兼蘭學師實爲本藩洋學之祖明治七年十二月十六日病歿五十七

と云ふのであつて、終りに明治二十七年十二月十六日と記して居る「香遠先生傳」には

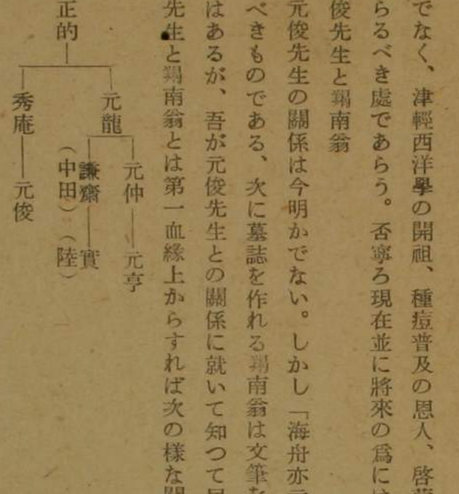
墓表ノ書ハ勝安房ニ乞フ海舟亦元俊ヲ知ルヲ以テ甘諾シテ筆ヲ執ル、碑文ハ陸實ナリ明治廿七年陸氏ト相謀リ勝伯爵ニ揮毫ヲ請ヒ佐々木五三郎碑石ヲ携帶し石工親方町監物金五郎氏をシテ彫刻セシメタリ舊藩御下屋敷九十九森境內ニ建ツ但此ノ地ハ元俊ノ所有ニシテ此所ニ於テ歿シ遺言ニヨリ此ノ地ニ葬ル

と、建立の顚末を明にして居るのである。即ち九十九森の地はひとり園地の巧をほこつた津輕侯の別墅として紀念せら

るゝばかりでなく、津輕西洋學の開祖、種痘普及の恩人、啓蒙的事業の先達者たる佐々木元俊先生の由緒地としても、永く記念せらるべき處であらう。否寧ろ現在並に將來の爲には、後者の顯彰こそ却つて意義あることではあるまいか。

（二）元俊先生と羯南翁

勝海舟と元俊先生の關係は今明かでない。しかし「海舟亦元俊ヲ知ルヲ以テ甘諾シテ筆ヲ執ル」との香遠先生傳の一句は重んずべきものである、次に墓誌を作れる羯南翁は文筆を以て天下に名を成せる津輕產の俊才である事は、洽く人の知る處ではあるが、吾が元俊先生との關係に就いて知つて居る人は甚だ少いやうである、此處に序を以て小述を試みやう、元俊先生と羯南翁とは第一血緣上からすれば次の樣な關係になつて居る。



即ち先生と羯南翁の父中田謙齋とは從兄弟同士である。佐々木正的は津輕藩醫で佐々木元龍同元仲同元亨と其跡を相續して藩醫となり謙齋と云ふ人は中田家に養子となつて實翁を生んだのである。又秀庵は城北龜甲町に一家をたてゝ町醫となり先生もこの龜甲町に孤々の聲をあげたのである、なほ正的の子、此の他數人あるのであるが此處には略する。

第二に元俊先生の永眠せる九十九森の地域は、陸羯南翁少年時代の緣の地である。元來羯南翁の生れは、在府町の中田であるが、中田家は元俊先生の勤めによつて移つて來たのである。大山龍助氏（羯南翁の實弟、昭和十七年八十歳）の記憶によると、羯南翁は十六歳から十九歳（羯南文錄には明治七年十八歳の時、仙臺に入學の事を記す）までにかけて此處に起臥して居たと云ふのである、元俊先生にも無論接して居るが、その前に於ては直接學問上の指導は受けて居

ないとの事である、しかし翁は元俊先生の働いて居た家屋に親しみ、先生の逍遙せし園池の眺めに浴しながら稽古館並に東奥義塾に學びつゝ父の業を助けて働いて居たのである、父は此の地に於て養蠶をやり、又水車場を設けて米搗の業を營んで居た、今も今年八十六歳になる中田みよさん（註三）と云ふ方が、羯南翁の「實」と云ふ名は巳の年生れであると云ふ事からつけたと云ふ事、養蠶の時は毎日のやうに山に桑取るにやらせられた事等を語つて居るのである、前述せる記者の幼時伯母に連れられて行つた處も、此中田家であつて、陸翁の父謙齋先生の事も又水車と云ふ事も今もごく輕く思ひ出てらるゝ氣がする。

さて吾人は仰松亭裡に眠れる元俊先生の英靈が、少年中田實を激勵鼓舞し、遂に天下の羯南たらしめたとは、こゝに敢て云ふまい、しかし先生と翁とは、血統上よりも、又同一地域に起臥したと云ふ上よりも、まことに深い因緣を有して居るのである、文豪羯南翁が海舟翁の墓銘を承けて、先生の大功績を永遠に傳ふる墓誌をものし、其冥福を祈つて居る事も、蓋し偶然ではないのである。

註一＝著者の父方の伯母で、佐々木元亨の妻である

註二＝弘前孤兒院主佐々木五三郎氏の所藏にかゝる、但遺憾ながら所々毀損して居る（口繪並に附錄第三參照）

註三＝中田謙齋の本家なる中田家の人

二、先生江戸に登る

（一）杉田成郷の門に入る

先生は年三十一歳に至るまで、父秀庵を助けて醫道に精進して居たが、偶在來の醫術のみにてはと感ずる所あり、嘉永元年修學を志して江戸に登つた、其登つた道筋、辿り着いた處等は今わからない、しかし先生の志は藩命によつて、

當時昌平黌に遊學中の兼松石居に認められ、其盡力によつて、蘭學者杉田成郷の門に入つた、「兼松石居先生傳」に、

當時杉田成郷は斯學の大家であつた、深く彼と交り相往來して西洋の事情を知るの助とし、君公にも其事情を献言した、一方には藩士を選んで杉田の門に入らしめた、佐々木元俊亦其一人である。

と記されてある、大山龍助氏の談によると、成郷の門に入るを目的に登つたとの事である、杉田成郷は有名な杉田玄白の庶子立郷の子であつて、儒學、醫術、並に蘭書を學び、初め幕命に依り天文臺に於て蘭書の飜譯に從事し、晩年蕃書調所教授に任ぜられたる人であるが、元俊先生出京の際は、本職の傍ら麻布北山伏井戸に私塾を開いて居たのである。しかし先生は其初めは學資に乏しく、非常に困難したらしい、實家よりの送金も滞り勝な爲めに、實弟が其給分の幾分を割いて、是を助けて居る美談もある、香遠先生傳記に

嘉永二年五月工藤健三郎（元俊ノ實弟）申出候實方之兄町醫佐々木元俊儀蘭學修業登之處宿元ヨリ爲登金相滞難澁に付於御國元健三郎御給分之内ヨリ月々二人扶持ツヽ御差引之爰元ニ而渡方被仰付度儀ニ付別紙勘定奉行申出之通被仰候

との公文の寫があるが、右の一例證である、又嘉永三年九月、先生は蘭書を寫して上納し其寫料を貰つて居る、修學の一助と致した事は疑を容れない。

さて先生が杉田塾入塾の年月と、其卒業の年月とは共に不明である、また其修業した科目も其程度も知ることは出來ない、大山龍助氏は三年ばかり入塾して居つたと言ふて居る、兎に角、嘉永七年の九月には既に杉田の塾を出で江戸麻布町にて一人前の醫業を營んで居るのである。

（二）麻布町にて醫を開業す

開業の年月も、また其評判も、今是れを知るべき資料を持たない、しかし先生は杉田の塾を出で、一人前の醫者となつても、小成に安んずることなく研學を續けて居た事は、次の藩の公文の證する處である。

嘉永七年九月町醫佐々木秀庵倅元俊儀勤學登之處數年蘭學格別出精之上相達候間勤學中三人扶持被下置年頭並御上下之節御目見得被仰付候

勤學中三人扶持と云ふ語句に留意したい、次いで安政三年六月御省略の方針から加へて修學數年に亘るの故を以て、御國下りの仰付もあつたが、翌安政四年再び蘭學研究を奇特とし、最初の通り、勤學中三人扶持を給はるとの記錄がある。

閏五月佐々木元俊儀來春迄滯府之上蘭學研究致度申出奇特之至りに付最初之通勤學中三人扶持被下置候

と香遠先生傳に載せて居るのである。藩に於ても諸事節約の折柄にも關らず先生の熱意を汲んで、是を許容したものと見ゆる、而して明年までと云ふ願意はなほ延長されたばかりでなく、藩よりの信用も益增大するに至つた、卽ち安政六年六月の一記錄に

一年頭御目見得奧通リ醫佐々木元俊儀蘭學格別心ヲ入レ數年來精學之處上達之旨相聞得奇特ニ付七人扶持被下置外ニ三人扶持勤料被下置小普請醫新規被召出候

とある佐藤彌六翁の蒐集した藩の公文書であるから充分信用の置けるものである。なほ先生は此の間、知名の士にも接し有望なる友人とも交際して居た、香遠先生傳記に「佐久間象山等疑獄ノ際、元俊モ疑ニ依リテ法廷ヘ出テ訊問ヲ受ケクリ」とあるも、海舟翁また元俊を知ると云ふ事も、共に其消息を物語るものと云つてよい、また江戸に於ける交友のうち後世名を成した人々には、神田孝平（後の元老院議官）柳河春三（後の朝野新聞社長）等の俊才が居る。

先生は斯くして洋書を讀み先輩や良友に交はりつゝ其學識を磨いて居つたのである、なほ象山の疑獄は安政元年四月で、先生痲布開業後間のない時であるが其疑の如何なるものであつたかは全く不明である、しかし岩川友太郎翁の遺せる文に「醉へば必ず天下を論ず」と云ふ見識者であるが故に、或はともと諾かれざるを得ない、先生はひとり仁術の道に精勵なるばかりでなく、一面國士たるの氣慨をも備へて居た事を留意しなくてはならない。

（三）數々の書を公にす

安政四年先生は「蕃語象胥」と題し、クラメルスの辭書を飜刻した、恰度麻布町に開業して居た時である。題簽に KRAMERS WOORDEN TOLK とあり、見返しに「安政丁巳八月奠准飜刻、蕃語象胥、遠西葛拉默兒私著、千八百五十四年原刻、弘前佐々木元俊藏校」とある。今此の書は甚だ數少くなつて居る、先生の一族五三郎氏も紙質の雁皮紙の樣なものであつたとの點までも記憶して居るが、紛失して其行衛もわからない、以上の事も文部省に出て居られる和田信二郎氏を煩はし、同氏が方々御詮索の結果、殆んど半年がゝりで知り得たものである。同氏はなほ此の書につき「飜刻とは申せ恐らく原本は印刷字體であつたのを筆寫體で寫しそれを木版にしたのであらうと思はれます。四五四枚を寫す勞力だけでも並一通りではありません、所々書き落して欄外に書入れて彫刻してあるのがあり、丁數は一、二、三など日本數字を用ひてあります」と云ふて居られる。なほ此の書は最近弘前高等學校で需められ著者も拜見の榮を得た。由來此頃は江戸に於ても蘭學の流行時であつたので、先生の出版も此の形勢に應ずる爲めのものと考へられる。石居先生傳には藩の江戸日記を引き、元俊先生が安政二年八月押込の刑に處せられたるを記し、或はこの刊行に關してではあるまいかと疑つて居るが、或はこの爲めの筆禍かも知れない、何とか眞相を把促致したいものである、なほ江戸在住中か否かは明瞭でないが、先生には「蕃語象胥」の他に、なほ次の著書がある。

練鐵訓象　三十冊

厚生舍密　十　冊

題目の上から其書の性質の如何なるものかは知らるゝのであるが、未だ實物に接せず、其解說書も得られない爲めに、其內容の委細をこゝに紹介することは出來ない、しかし先生の斯る力作は、先生の實力をして益練磨習熟せしめ、後進誘導の上にも少なからず役立つたことは爭はれない。

香遠先生傳記に

又元俊ハ獨リ蘭學教授而已ナラス蕃語象胥及ヒ厚生舍密ヲ著ハセリ、此時ニ當リ炮術並化學者等ノ「砲術訓蒙、舍密開宗等ヲ携ヘ來リ質問シ教解ヲ乞フモノ少カラズ、洋學ニ關スル事ハ凡テ元俊ニ由ラザルナシ」は多分先生が歸國後の樣子にも見ゆるが、「此の時に當りとあり、この「洋學ニ關スル事ハ凡テ元俊ニ由ラザルナシ」云々の事は、或は江戸に於ての事柄をも含むかも知れない。因に砲術訓蒙は杉田成卿、舍密開宗は宇田川榕庵の著述に成るもので、當時砲術又は化學の研究者の必携書であつたものとも思はれる。

（四）蕃所調所出役を命ぜらる

安政元年正月米國水師提督再び渡米し、同年三月神奈川條約の締結を見るに至つた。是に於て幕府は外交、國防の事の多端となりしは勿論、洽ねく西洋事物を知る事の急に逼らるるに至つた。爲めに、翌安政二年には講武所を新設し、次いで安政三年總領事ハリスの下田に來れる年には、外國事務局並に蕃書調所を設置した、講武所並に外國事務局の事は暫らく措き、蕃所調所は初め九段坂下に設け蘭學を中心に西洋の學術を教授するを目的としたのであるが、萬延元年小川町に移し、英佛二學と化學の一科を加へ、次いで魯語獨語を加へ文久元年新に又物產局を增置した、しかして物產局增置の年今まで幕士のみに修學を限つたのを藩士の入學をも許可するに至つたものである。そして先生の師杉田成卿も調所の教授となつて居るのである。

然るに元俊先生は或は恩師の推擧にも因るものであらうが、右物產局の創立と共に幕府より其所への出役を慫慂せられたのである。

萬延二年（文久元年）七月津輕越中守家來佐々木元俊儀蕃書調所物產學出役江被仰渡候而差支無御座候哉之旨御尋之趣奉畏候然處當月朔蕃所調所勤番組頭ヨリ同樣御談御座候間其筋江相達候處右元俊儀當節用向有之在所表江差下方之

儀申來居候折柄近々在所表江出立致候樣申付罷在候間折角之御談ニハ御座候得共無據御斷申上候旨去ル九日御答書差出申候處猶又同所組頭被申聞候ニハ斷之旨承知致候得共今一應篤重役共而評議之上調所江差出方之儀精々被申談候乍去前段不得止事及御斷候次第而何分ニモ難默止筋合ニ付乍隨意一先在所表江差下用辯之上追而出府爲仕候者其節者御用被仰付共於此度何卒右等之趣宜御聞屆置被成下度御尋ニ付此段申上候　以上

七月十三日

津輕越中守家來　　平井修理

右の如く藩にて一回斷りを申上げしも「再び今一應篤と重役共而評議之上調所江差出方之儀精々被申談候の所望振りは、幕府方にて先生を認めたる事の甚だ厚かつた事を證するものと云へよう。

斯くして先生は藩用あるの故を以て、此の好機を逸し、終生故鄉の地にのみ活躍するの止むを得ざるに至つたが、若し此の時、先生がなほ江戸に滯在して、當時日本最高の學堂たる此蕃所調所に於て研讃を續くることを得たとしたならば、恐らくは陸翁と同じく天下の人材として賞揚せらるゝの人物となつたであらうと思ふ。蕃所調所は文久三年名を開成所と改め、明治十年の東京大學（東京帝國大學の前身）設立の母體となつた事は、此處に詳述の必要もあるまい。

三、先生故鄉に歸る

（一）御國下りを命ぜらる

幕府より先生に對し蕃書調所出役を所望せるに對し、弘前藩にては默止し難き用向にて在所表へ差下さざるべからざるの故を以て斷つて居る、幕府にても是以上に强いて要望も出來なかつたと見えて、藩の斷りを許容して居る、香遠先生傳記に引用されて居る藩の公文に

御留守居申出候蕃書調所勤番組頭ヨリ呼出ニ付平井修理出候處佐々木元俊儀蕃所調所物產學江出役之儀夫々其筋江被

仰渡差支有之趣ニ付難被及御沙汰旨隨而元俊儀此上ハ御在所表江被差下候而聊子細無之旨委細申出候間則差下申候
と其消息を示して居る。なほ同書に次の樣な一文もある。
佐々木元俊申出候御國下被仰付來月十日致出立旨伺之通
とあり、先生は文久元年の七月に調所方面の結着がつき八月の十日に江戸出立の豫定を定めたものと見ゆる、そこでこの豫定の如く實行されたかどうか、從つて何月何日に弘前に到着したか、それは不明であるが藩日記に據ると文久元年十一月には既に弘前に住居して居る、而して落着いてからの最初の住居は弘前東長町であつたとの事であるが、今のどの邊か、また家宅や家族の模樣等も委しく知る事は出來ない、但し妻は江戸から同道して居る。

（二）蘭學堂教授となる

香遠先生傳記に「元俊弘前ニ着スルヤ蘭學士トナリ日々稽古館ニ出テ教授ニ從事ス」とあつて、既に稽古館內に其準備が出來て居つて、到着と同時に直ちに教授を開始した模樣に見ゆる、津輕承昭公傳には
安政六年二月廿八日弘前學問所內ニ蘭學堂ヲ設ケテ蘭學ヲ研究スル道ヲ開キ諸士及在町醫ノ子弟ヲ奬勵シテ入學セシム
とあつて、先生下着の二年前に既に蘭學堂が設置せられてゐる樣である、ところで岩川友太郎氏の「五十年前に於ける舊津輕藩の洋學と題する文中には
抑舊藩の洋學を奬勵された事は頗る古く安政六年從來の弘前學問所の稽古館內に蘭學堂なるものを設けて蘭學修業の道を開き士族及醫師の子弟を奬勵して入學せしめたのを濫觴とする、この蘭學堂を開設するに至つたのも偶然でなく當時佐々木元俊と申した醫師は其以前江戸へ出て、杉田成卿先生に就て蘭學を修め麻布に一戸を構へて開業し神田孝平、柳川春三等と同窓にして親しく相交り名譽俄に揚れる所から同人は新規に召抱へられた、蘭學堂は全く此の人の

爲に開かれたのである。
とある、それで以上の記錄から考へて見ると、蘭學堂の設置は先生下着の前である事は間違ひないやうだ、思ふに幕府よりの所望に對し、默止し難き用向と云ふことは、此の蘭學堂設置が決定せられ、元俊先生の歸國を待つて居るだけの狀況になつて居た爲めではなからうか、そこで此處に最も注意すべき事は、岩川翁の文中にある蘭學堂は全く元俊先生の爲めに開かれたと云ふ一句である。

さて蘭學堂の組織、教科並に生徒等の委細は今詳かでない、曾て上京中先生の世話にもなつた工藤岩司は呼び寄せられて蘭學二教となつて居る、職名は不明であるが同樣の木村和一も歸國を命ぜられて居る。

由來先生は蘭學堂を創建したと云ふばかりでなく津輕に於ける蘭學の興隆には其以外にも預つて力ある人である、石居先生も嘉永三年蘭學兼業を藩より命ぜられて居るが、元俊先生はそれよりも二年早く蘭學の研究に沒頭して居る、而して兼松先生は寧ろ漢學を主とし、洋學は其綱領を蘭學者を通して聞取る程度であつたらしいに比し、元俊先生は實際に蘭語を學び、蘭書を通して西洋學に通ぜんものと專心して居た、從つて其後蘭學修業の爲めに江戸に至つたものは、皆先生を其道の先輩として兄事し、且つ修學に關する指導を受けた。香遠先生傳記に
嘉永年間米艦渡來以來蘭學ノ必要ヲ感ス出京セルハ成田善三郎、百川文作、工藤岩司ヲ始トシ、工藤淺次郎、木村和一、今貞次郎等江戸ニ至ル者皆悉ク元俊ニ因ル
と書いて居るのである。成田善三郎は後の梶文左衞門で安政元年江戸に登つて居る、他の諸氏は今不明であるが、皆先生が歸國以前の事たるは云ふまでもない。

なほ先生歸國後蘭學堂の正規學生並に自家の書生に對し孜々として蘭學並に洋法外科の教授を怠らなかつたのであるが、其弟子のうち最も望みを囑せられたものは小山內元洋であつて、明治元年八月九日の藩日記を見ると「佐々木元俊

弟子元洋相應手廣療治之事」と云ふ文面もあり、同月十四日の同日記に佐々木元亨、佐々木元俊等の蘭學下科教授方の下に元洋は、小嶋岱淵等と共に其教授方手傳云々の事が見えて居る位である、香遠先生傳記にも

門下生トシテ小山内ヲ出セリ小山内元洋後建ト改ム今ノ文學士小山内薫ノ實父ヲ養育教導シ元俊ノ家ニ寓セシメ己レガ子ノ如クシ元治年間元俊學資ヲ給與シテ出京セシメ江戸師範杉田元端先生ニ就イテ蘭學ヲ學バシム、維新ノ際、弘前ニ歸リ藩醫トシテ軍事ニ從事ス、建ハ舊幕臣小倉氏ヲ娶ル、其後東京ニ出テ大學東校ノ教官トナリ後陸軍大軍醫監ニ任セラレ廣島陸軍衛戍病院在職中病歿、明治五年（頭註に小山内元洋大學東校ノ教官トナリ明治五年眼科約說三冊を譯述とある）

と記し、其良弟子を生んだ事を讃へて居る、今も先生の甥佐々木五三郎氏は杉田元端より先生宛の書簡を藏して居る、其要旨は小山内元洋歸藩の命ではあるが今歸すのは甚だ遺憾である、自分の處で修業させることにした旨を記し、後肝油製造の事や洋書買入の苦心等を述べて居るのである。弟子としては小山内元洋の他に石郷岡東彌、成田忠吉、百川學土岐八郎、佐藤彌六（佐々木和策氏は門弟でないと云ふて居る）岩田平吉等の名を知らるるも、全部が門弟なりや否やは不明である、但し佐藤彌六翁は一時先生宅に起臥して居た事は確かである、杉山薫之進翁もごく小さい時一寸同家に居つた事もあつたと云はれて居る、なほ前述の石郷岡以下岩田までは高山文堂翁の記錄に據るものである。

（三）種痘の普及を計る

舊記に據ると維新以前には天然痘は毎年のやうに領内に流行したとの事である、その中でも慶應三年のは近年に於て最も甚しい大流行であつたのであるが死者は壹萬人程にも及んだのである、藩に於ても極力豫防と療養とに努めた事は云ふまでもない、慶應三年御用留四月八日「覺」に

於醫學館種痘施行被仰付候に付希之族同所に罷出種痘受候樣兼而被仰付有之候所兎角不勤之者多く有之旨相聞得然處

昨年新田在より疱瘡流行之處頃日に至り弘前表江傳染之旨相聞得候間此度於醫學館定日ニ不限日々施行被仰付候間御家中御給人並町々御近在小兒共共一町限ニ人別取調同所江相廻種痘致候樣被仰付候尤遠在浦々之儀者兼而被仰付居候在町醫共ニ而施行候儀被仰付候此旨諸組諸支配並寺社門前在町浦々江可被申觸候己上

四月八日

御目付中

但佐々木元俊申出書付江北岡太淳添書の上申出本文之通御觸書被仰付候

又慶應三年九月十一日の或る町年寄の御用留に

此度疱瘡流行之處此節至難瘡之者も有之趣相聞候間格段以御沙汰御目見得以下小給之族並町々小者ニ而手當行屆兼候者共江御施藥被下置候ニ付右之趣御醫者中江被仰付候猶又町醫之義も右同樣施藥被仰付候間銘々調合分明細取調方申出之處代料渡方被仰付候此旨町醫中江可被申候己上

とあり、同月御用留の廿二日の條に神明宮八幡宮に痘瘡安全之御守札惣町中に差越云々の事、同三年十月十五日長勝寺にて自分物入にて十八日より十一月朔日まで二七日大乘妙典一千部供養云々の事等が見え、身心兩面に亘り救恤を行つて居ることを示して居るのであるが、是によつても其酸鼻の狀を伺ふ事が出來やう、さて種痘の痘瘡豫防に有効なることは相當早くから認められ、些少の實施も見られたのであるが、充分に効を奏しなかつた、小山内日記抄に

御番醫之内とも近年傳授を得候而植候人も有之候午去習熟せざれば植候而も疱瘡に相成申者も有之由に候

文久二年五月佐々木元俊於江戸表相學罷下り候種痘施行之義是迄御醫者之内其法を學覺候人も有之候へ共精々いたし候儀にも無之候處佐々木玄俊儀も此度其法を深穿鑿致し罷下候に付施行之儀申立惣觸も被仰付候事に候

とあり、元俊の下着と共に普及の機運に至つた事を說明して居る、なほ津輕承昭公傳にも同樣の記事がある。

種痘之奇法を採下り弘めたるは醫師唐牛昌三之二男昌考なり、然とも兎角信仰する者少く或は再感少らん事を疑ひ何分進兼たる處、佐々木元俊江戸より下り醫は仁術なれは謝禮なく何百人に而も來るへし一世の難を救はんと官へ申立種痘舘を取建定日には幾百人へ施行せしより一同進合に成今は種痘せぬ者もなし遠方へも出張して施行する事になりて人々安心に至りたり

右記述を對稱すると小山内日記の御番醫云々は唐牛昌考等を指すものでもあらうか、然るに先きの御番醫等は「精々致シ候義ニモ無之ニ先生ハ遠邇ニ奔走シテ施療ヲナシ、諄々其理ヲ說諭シテ其効ヲ悟ラセシム」とある、中にも領内悉く之を行ふに至ると云ふ點は特に留意しなければならない。誇張輕薄の筆を弄することのない外崎覺翁の言句であるたけに一層重きを置かるゝ次第である。此點は安政四年の藩日記を見るに、江戸御出入町醫桑田立齋の事に關し唐牛昌考自身申出たる書付にも

「御國之儀者、兎角疱瘡不進ニ候得者何程御世話被下候而茂此後疱瘡相望候者有無難斗」

と唐牛昌考自身も認めて居るのである。

次に種痘舘設立の顚末を知るべき一資料を紹介しやう。

一、佐々木元俊儀種痘法御郡内に施行仕度ニ付種痘舘御取建被仰付度旨申出候得共外場所江御取立被仰付候而は御物入增にも相成候に付醫學舘へ取束諸事御取扱候樣被仰付候旨北岡太淳申出之通被申付候間於同所種痘いたし候樣被仰付候左候ては御郡内相應之醫生見立施行申諭往々一般に種痘いたし候樣共被仰付候樣御家中並在町江御觸出之儀を内點羽之趣共向々に被仰付候樣三奉行沙汰之通太淳申出左之通

一、種痘施藥諸生寄宿扱方之儀を左之通被仰付度

一、種痘舍に而病院相兼

種痘之日　　司監出席

種痘受は名前並痘之眞擬取調頭取に差出月調御用所江差上申候

一、在浦々之儀者種痘被仰付候醫生に而種痘受候名前取調醫學舘に差出醫學舘より御用所江差出申候

一、病院施藥之儀者療治願出之者御醫者並諸生診察いたし醫案學頭江差出學頭評議之上療治爲致候毎月兩度定日差出

一、諸生寄宿五人御定被仰付其氣望之者菜飯料差出寄宿いたし候樣

一、右御觸出之儀者右之趣に而被仰付度

一、此度醫學舘江種痘舘差建佐々木元俊並心得之御醫者江被仰付種痘施行致せ御城江罷出候樣被仰付候之間同所江罷越一統種痘候樣

右之通御家中市中江惣觸被仰付度

なほ右之續きに在浦支配頭江達すべき文案もあるのであるが畧する。

又藩日記文久二年三月四日の條に

此度醫學舘江種痘舘被差建候に付御家中御給人並御近在町々小兒共當月より月々日割の上晝九時より致種痘候樣被仰付候間勝手次第同所江罷出種痘受候樣被仰付候此旨可被申觸候　以上

と其實施を示して居る。

なほ香遠先生傳記に據れば元俊は種痘舘の主任となつて專ら種痘に從事すると共に自宅に於ても望の者へは無代價にて施行した。皆元俊の宅に來集し、常日は臺所も、茶の間も、一圓種痘患者にて充たされ妻まさ子も亦自ら針を執つたと傳へられて居る。又先生の弟玄悌の妻まつ子も、常に手傳をして居たとの傳へもある。又先生は弘前のみならず在々の醫者へも普及せし狀況は津輕日記に

慶應元年九月四日佐々木元俊儀種痘簡便法施行之儀鰺ケ澤町醫手塚右一、岸太春、青森町醫南了益、窪田文雄、南了庵深浦町醫山崎元惟、舞戸村醫藤田元英在之者共へ大に傳授相濟候旨とある、かくて兼松成言翁が建言文に述べたる如き幾多の困難と戰ひつゝも、着々と實効を擧げて居たのである。

（四）厚生福利の道を講ず

先生は舍密學にも造詣深かつた爲め、是を活用して、醫業の傍ら大に國產の增進と、民間の福利事業にも力を盡した其筆頭に擧ぐべきは舍密精練場を九十九森の地（下久保）に設けたことである、大山龍助氏に據れば硫酸も取り火藥も製造したと云ふ、或は思ふに此の爲めに藩より此の地の拂下を得たのではあるまいか。笹森嘉吉氏が其叔父土岐八郎氏（先生の弟子）より聞ける所に據れば先生は重役に談じ無償にて藩より貰ひ受けたとの事である。又香遠先生傳記に、曰て西津輕郡舘岡村海岸に於て石炭にあらずサルケにあらざる黑き土の層があり、是を乾燥するときは石炭の如き香を發して燃る事、恰も石炭の如きものを發見したが、政府は元俊に命じて是を調査せしめた旨を書いてある、其調査の結果は不明である、また同傳記に久渡寺のマンガンは元俊の發見する處と云ふて居る、又岩川友太郎の遺文に

岩木山で硫黃を精錬し、目屋赤澤の兩地方より石炭を採堀して是よりチヤンを製し、或は朝鮮人參を試み或は鬻引を用て酒精を採り藥品を精製する事等を行つた

とある。右のうちの目屋と同樣の處か否かは今の處不明であるが、津輕承昭公傳を見ると、目屋野澤村、赤石澤大然村の兩地に石炭を探險せるは、佐々木元悌（元俊の弟）註四　であつて、其年も先生歸國前の事になつて居るが、岩川氏はこれを混同したのか、先生も其後調査して見たのかは明かでない。

左に承昭公傳の一節を揭ぐる

安政七年六月藩內目屋野澤村、赤石澤大然村ノ兩地ニ於テ石炭ヲ發見ス乃チ其通ニ心得アル洋醫佐々木元悌、其他ノ

役員ヲ派遣調査セシメタルニ、採堀運搬多費ヲ要シ得失償ハサルヲ以テ燃料トシテ採堀ハ爲サザルモ村市ノ石炭ヨリ黑油ヲ製シ之ヲチヤンに代用西洋形船青森丸其他臺場、雨覆、砲臺等ニ供スルモノトシテ製造ニ着手セシム

とあつて、元悌等の調査の結果をも明にして居る。

又先生の蘊蓄は奥羽戰役の際に於て特に發揮せられて居る、しかしそれは醫術ではない、醫術の方も無關係とは云へないが、これは先生の弟子によつて其責務が果されて居る、由來此の有事に於て、先生も白鳥數馬隊に時の軍醫として出征する豫定ではあつたが、先生にはそれよりも大切なる任務がある爲めに行はれなかつたのである、香遠先生傳記に次の一文を所載して居る。

慶應四年八月朔日佐々木元俊儀白取數馬へ附屬出張被仰付候得共同人儀者數千貫目の筒藥調合並眞硝石其外同所入用灰汁製造硫黃華石灰黃蠟瀝青雷管多端之製練引受居候ニ付、何レモ當節柄必要ニ付、居合不申候而者爲ト差支相成候間出張之儀者御免之上出張被仰付度儀申出之通被仰付、右ノ代リ表醫者嶋廣山出張被仰付之儀點羽沙汰之通

八月十日

松本宗周

即ち藩廳の記錄から得たもので、先生の從軍せざる理由は以上の如き事情である。

さて記者も最近小時の時間を得て安政元年以降明治三、四年頃迄の藩日記を粗讀したが、其中にも元俊先生の活動は所々に記載せられて居る。

其類例を摘出すると、元年五月先生は百澤村領三本柳に於てカルキ鑛製造の業を起して居る、同年六月には黑石家中に貝灰燒立法並にホットアス其他火藥製造心得たき者に教習致したしと申出でて居る、なほ同時に浪岡奥內の貝が石灰とする事の適否を試みたき旨をも附加して居る、又明治二年二月先生より遣子野木村の水車御買上の事を申出でて居るが、どんな事情かわからない、しかしこの「水車」と云ふ事には注目を拂つて置きたい、同年三月には筒藥に就いての

事、同年五月には硝石焚增（硝石の製造增加）の事、同年八月には火藥調合云々の事等が見えて居る。斯る事柄は諸書の涉獵に據つてなほ多分に得られはしまいかと思ふが、現在に於ては其調査の餘裕のない事を遺憾とする、しかし以上の例證だけに於ても充分先生の斯道に堪能であり、進んで習得の智識をたえず實行に移すことに、勇敢であつた事を知ることが出來やう。

なほ奥羽の役の最中には、先生の從車は取りやめとなり、其弟子には先生の任を完ふした事をのべたが、左に一例を附記して置く、

香遠先生傳記に

佐々木元俊弟子小湊ヘ出張被仰付候處怪我人多勢之節者手合兼候間青森町醫之内ヨリ一人附屬被仰付 在町醫之内被仰付候儀候ハヽ小普請醫之内ヨリ一人被仰付度儀申出佐々木元俊弟子安藤孝哉被仰付哉之儀點羽伺之通

とある、藩廳記錄の一抄錄である、先生の第一弟子小山内元洋も、藩の軍醫として働いて居るが、其任務地を明かにして居ない。

（五）公立病院を興す

香遠先生傳記の終りに一枚の附箋が附いて居る其文面に

維新後最初ノ舊青森病院ハ佐々木元俊指導斡旋之上開院シ、尙舊木造病院、弘前病院ヲ開設シ是ニ從事セル醫師ハ何レモ元俊ノ門下生ナラザルハナシ

と書いてある、この事は、他に是を確證すべき資料は今の處ない、どの程度のものかも不明であるが故に右參考迄に記載することにする、青森に於ては明治六年在縣官吏及町内富豪の義捐金を以て病院敷地六畝二十二歩を購求し青森町共有とし、創立院長は足立當通で濟衆病院と號した旨、柏原筆記（青森市史引用）にあるが、元俊先生關係の事は見當らない、足立當通の事も目下詳かでない。先生の弟佐々木玄貞は青森病院創立時の副院長であつたとも傳へられて居る。

註四＝この元悌は秀庵の五男精三の事である、中には玄悌と書いて居る本もある、下北郡田名部の佐々木吉三郎家の現存位牌には「玄貞」とある、藩日記には津輕承昭公傳の如く多く元悌と見えて居る。

四、先生の生立と一族知己

（一）先生の生立

先生は町醫佐々木秀庵の長男として、文政元年十一月八日、弘前龜甲町に孤々の聲をあげた、佐々木五三郎氏の說に據ると秀庵は醫業あまり流行せず、叔母は五人の子供を養ふに機織をなしてまで家計を凌いで居たとの事である、即ち先生は豐かならざる家庭に生長したものと云はねばならない。

幼年時代、少年時代、その天禀の現れも、學習の狀況も全く知ることは出來ない。しかし年三十一歲までは父の家業を助けて居た事であれば、或は思ふに父の膝下に漸次其道を心得たものと推せらる。

父秀庵の長兄は佐々木元龍と云ひ、江戸にも學び父正的の後を承けて藩醫となつて居る。正的の子孫には陸實翁の父謙齋の如く御坊主を職とする中田家に養子となつた人もあるけれども、男女の數人は醫家に緣づいて居る、先生の母は神氏、名は不明神氏の家庭も今不明である、先生の妻はまさ子、東京玉置氏と云ふも、身分、地位等不明、先生死後一時東京に歸つたが、再び歸り南部田名部の先生の弟、佐々木精三（玄貞）氏宅で死んだ、江戸登り前にも妻があつたが離別したとの事、前妻後妻共に子はない。なほ先生又の名は宗順、香遠と號した。

先生の兄弟は自分を入れて男子五人の間柄で、即ち

		生年	死亡	年齢	備考
長男	元	文政元年	明治七年	五七	
次男	覺玄	文政五年	明治廿八年	七四	（僧籍に入る）
三男	健三郎	文政九年	明治十年	五二	（工藤家に入る）
四男	新藏	天保二年	明治十年	四七	
五男	精三	天保七年	大正六年	八二	

△註、覺玄の生月不明、太陽暦に交替の事もあれど、假りに文政五と死亡年月を基準として逆算し置く。

の男五人共にそれ〴〵の出世をなしてゐる。五男の精三の生れたときは先生は十四歳に達しただけで、父秀庵翁が餘り實入のない醫師であつたとすれば、その頃の先生の家庭經濟も想像に餘りある處である、先生が父の業を助くる樣になつてからは或はどうかとも思ふ。香遠先生傳記に收入は三等を下らずとあるが、そんな時もあつたのかもしらない、しかし其三十一歳（嘉永元年）卽ち上京の節は精三は十三歳、新藏は十八歳、健三郎は旣に仕官して父母としては子供の爲めに餘りに手のかゝらざる頃ともなつて居たとも見ゆるが、家計はなほ豊だと云ふ程ではなかつたらしい、上京せる先生に其家庭より貢ぐことの容易でなかつた事情によつても知らるる處である。

（二）先生の兄弟一族

先生の男弟四人皆悉く一角の人物であつた。次男覺玄は近江國比叡山延暦寺に學び、三部傳燈阿闍梨堅者法印の稱號及び大僧都の僧階を授けられ、歸國後弘前一輪山桂光院報恩寺（藩主菩提所）の住職となり、晩年弘前胸肩神社の神官となつた人である。

三男工藤健三郎は曾て公用を以て大坂に赴いたが、偶時勢の趨く處を察して脫藩し、京都に至つて勤王の志士と交つた。東北戰爭起るや奥羽征討使澤三位公に隨從し、維新後には箱館裁判所清水谷公考の下に仕へた、其後の經歷に對して特別記すべきものを今持合せて居ない、明治十年富田紙漉町一番地の弟新藏宅に於て沒した。

四男新藏は長兄元俊先生の晩年の活動の如く製紙業、製糸業、製陶業、製瓦業等の事業を起して居る、卽ち製紙業は維新前より始めて居つたもので、其功により帶刀を許されて居つた、明治以降に於ても男女數十名の職工を日日使用して、雁皮、奉書、仙過、唐紙、美濃紙、手紙、手切等の製紙を產出し、縣廳其他の用紙をも供給したとの事である、今も其子佐々木五三郎氏の藏せるものに

明治十年內國勸業博覽會褒賞薦

青森縣管下　陸奥國津輕郡富田村

佐々木新藏

紙

麥稈紙ハ肌滑ニシテ黃ヲ含ミ美ナリ苦木紙檀紙新考ニ出テ大ニ益アルヲ見ル其他各紙質嘉ク所用多シ右事項ニ因リ花紋賞牌ヲ附與セラレンコトヲ申請ス

審査官　主任　朝日升□
列座　石田爲武□
同　川上寬□
同　近藤眞琴□
同　從五位　町田久成□
審査官部長　從五位
審査官長　正五位　前島密□

內務卿　從三位　大久保利通□

右審査官ノ薦告ヲ領シ之ヲ授與ス

明治十年十一月二十日

と、いふのがある。

製糸工場には女工數十名を雇ひ、地方の繭を買集め、製糸を行ひ、輸出をなした。

瀬戸燒は長兄元俊先生の所有地九十九森境内に大工場を建造し、京都より職工吉兵衛と云ふ者を招き良土を京都よりも取寄せ製造した、此の燒物には吉兵衛燒の稱もある、同時に製瓦の業をも行ひ、青森聯隊營舍用の瓦は同氏の製造納付せしものとの事である。なほ同氏の家の瓦葺は當地瓦家根の元祖なりとの稱もある、明治十年死歿せるを以て斯る活動も、大體に於て元俊先生健在の同時代の事と思惟して差支ないと思ふ。

五男精三は始め玄貞（元悌）と稱した、先生の跡を繼いで杉田の塾に遊び、歸つて蘭學堂の典句となつた、萬延二年津輕藩にてスクーネル型の船を建造せし時、目屋村田代山より石炭を得てテールを製してこれを實用に供した、慶應年間再び江戸に學び、歸國後弘前にて醫を開業したが明治十二年田名部町に移り傍ら猿ケ森の石炭山を始め炭山事業に沒頭した、以上覺玄、健三郎を除く外は、二弟の經歷並に事業共に先生に因る處少なからざるを見るべきである。

次に一族緣者のうちで世間に名を知られた人は、先生の從兄弟の孫にあたる佐々木文蔚、同從兄弟の子に當る中田實である。佐々木文蔚は東京大學醫學部に學び、卒業後島根縣松江病院長となつて赴任し、後海軍々醫學校の教官に轉じ海軍大軍醫となり佛蘭西に赴き同國製造の千島艦（水雷砲艦）八百噸に乘組廻航の途中、明治廿五年愛媛縣沖合に於て英船ラヴェンナ號と衝突し、同艦沈沒に際し殉職した、春秋に富む有望の身を以て、まことに惜しむべき限りである。中田實（幼名巳之太郎）は後陸と改め司法省法學校に入り、其後幾多の辛苦を嘗めつつ修學を遂げ、日本新聞社長となり、羯南の名を以て文名を謠はれたる事は世人周知の事である。

次に先生の嗣子の事を一言して置かう、先生には子なく玄貞にも子がなく新藏の子金太郎を其養子とした、金太郎は後文美と改めたが、幼少より蘭學を習ひ、天禀の學才を有し、維新後帝國大學の前身たる開成所へ

貢進生として、藩より推選せられ、鳩山和夫、齋藤修一郎と共に、三才子と稱せられたが、蒲柳の質で其業を了へなかつたとの事である、しかし飜譯家を以て名を知られ、一時落魄した時もあるが最後山口高等商業學校に英語を教へて居た。其死亡年月と後繼の事は未だ詳にして居ない。

（三）先生と杉田家

先生は杉田成卿を師とした、蕃所調所中に物產局が設置せられ、其出仕を慫慂せられたる時に成卿は同所の教授となつて居る、恐らくは成卿の推擧に因つたものではないかとも思ふが今明證を得ない、故山に歸つてからも、恐らくは音信を絕たなかつた事とも思ふが、今これを徵する何物もない。こゝに成卿の義弟に當り弘化三年には實家（杉田玄白の家）を嗣げる杉田玄端より先生に送られたる書簡一通佐々木五三郎氏所藏のものがある、杉田家との交情の濃かなりし點も、また互に醫術や舍密の學にいそしんで居る狀況もよく現はれて居る、些少長いが左に紹介しやう。

九月十九日之貴簡本月廿四日落手辱致拜見候時下寒冷之砌に御座候處貴地御揃愈御勇猛被成御起居候由珍重之御儀奉存候次に小家一同無異消光罷在候間乍憚易貴慮思召可被下候然を元洋儀此度御國元へ是非々々爲引取之旨 御屋敷より嚴命有之候處近時大にブックも讀め來り且つケナースも少々心掛候存知に相成候處只今歸國被申付候而は甚殘念之仕合當人は猶更歎息仕候次第に有之候間小子御屋敷へ罷出河野六郎殿迄拙家へ貰受修行爲仕申度旨申出 候處先づ當方に落付修業罷在候樣相成於小子も大慶仕候事に御座候

肝油製法當夏箱舘迄申遣候處先月上旬試之爲め壹瓶回し來候に付、早速試驗仕候處誠に上品に而舶來之上品と全き同樣に有之候貴地に而も御製法相成候は必す上品相出來可申と奉存候製法御出來に相成候はゞ御廻し可被下旨參候はゞ早速試驗可仕候

ヨチュムカリ製法之儀先便にも申候に付其後寸暇を以飜譯いたし置申候間今便奉差上候御試用可被成候

マンガーンカルキ硫酸曹達等澤山御國より生産いたし候由至極恐悦之御儀に奉存候御國産に被成我封内は申に不及外國へも輸出被成候様奉存候

舍密書之内テロノロヂー御買入被成度旨方今は蘭書至而拂底に而中々御望通之者江何れへ△△に有之間敷奉存候小子ヒュヘランド治療書多年相望三港へ參る人に賴み遣候へ共更に無之候に付歐洲へ參候人に賴遣候處彼地にも無之ヤット某先生の家類顚いたし候に付拂物等を彼地に而バンドをかけさせ送越吳候程之事に御座候近時流行は英佛之學に付英佛の書ならは少々づゝは入手仕候得共蘭は見切候より外無御座候尤小子肥田濱五郎蘭へ參候時賴遣候書當春到着人身究理より病學論治病論迄凡そ拾壹部八十三冊買來り吳候に付代金を問へば五十三兩許に相成よし誠に下直之事に驚入申候右に付當△ブック□□罷在候處へ又候英文之解剖學生理學之書（トルナル著）壹部圖大軸二幅亞墨利加板△科（サミュエル著）圖入十二冊内科書（ウード著）大本△冊藥劑書（ウード著）同斷生理學（ダルトン著）大本壹冊別に内科書（コップランド著）頗る大本三冊其外亞國セーミー書（ホウ子ス著）大本二冊醫科顏府（ゾムソン著）大本一冊入手仕候見る所事々新聞創見一々難盡言語候得共中々容易に反譯仕候譯には參兼申候其内何ぞ反譯出來候はゞ入御覽可申候

小林武と申仁歸府之由に而海栗御托し御惠み被下難有不堪感謝同人にも何れ追而面會可仕奉存候今年奥羽不作之由可患乍併香港柴棍呱哇之好米外國より輸入仕候に付右も不足憂然處去十九日横濱大火に而市街官廳外國人居留地一同燒失に付輸入物莫大灰燼と相成候よし一々哀痛右件々相答申上度此如ニ御座候

十月廿五日　杉田玄端

佐々木元俊様

尙以時下御自愛專一可被成候フロー様よりも御傳意成下家族一同申聞候處尙又宜敷申上候様申出候已上

□、磨滅其他にて著者の讀み得ざる分

△、毀損の爲め全く讀み得ざる分

右は取急いで騰寫したもので、且つ虫喰磨滅、其他記者の不可解の處もありまことに不完全ではあるが、大體は推測が出來やう、この文の内容を見ると玄端と先生とは、時折音信をかはして居た模樣に見ゆる。九月十九日之貴簡云々を初め其内反譯出來候はゞ云々の類よりも明かなる處である。なほ此の書面は今年奥羽不作の點よりして明治二年のものと思ふ、玄端は蘭學者であるが、慶應元年外國奉行支配飜譯頭取となつて以來、公務の傍ら英學をも學んだ、この書面の中にも世は蘭學を捨てゝ英佛の學に急轉しつゝある樣子を示して居る。

（四）先生の交友知己

江戸に於て、神田孝平、柳川春三等と親交深かりし事は前述した、また江戸に於ても、弘前に於ても兼松石居翁と別段の間柄であることは再言するまでもない。勝海舟も先生を知る一人であつたと云ふが、斯る關係の人々は江戸在住中なほ他にも多數あつたのではないかと思ふ。最近得たる一資料に靜岡藩宮崎立玄の言として佐々木香遠が中村敬宇とも知己なる由を記して居る。又鄕里に於ても、當時の錚々たる人士と交遊をなして居る。卽ち高山文堂翁記錄によると

西館參政　平井東堂　木村繁四郎

楠美太素　兼松成言

杉山龍江　今　敬一　手塚玄瑞　梶　文左衛門

の名が所交の人々として列擧せられて居る、云ふまでもなく西館參政は當時藩の重鎭たりし西館孤清、楠美太素は維新前後用人を務めし人、膨大なる楠美日記の記述者としても又知られて居る、兼松成言は藩の儒者として重きをなせし計りでなく、藩公侯幼時の傅に擧げられ、文作の名人としても喧傳せられたる人である、平井東堂は書の名手で石居の

文東堂之書と並び稱せられ、始めは江戸の定府であつたが、後弘前に下つた。木村繁四郎は野邊地戰爭、箱館戰爭に大隊長として奮戰せし人、現木村繁四郎翁は其子である、杉山龍江は同じく維新の前後に於て藩政の重大事に參與せし地方の大人物であつて現杉山壽之進翁は其子である、今敬一並に手塚玄瑞は醫師として又文才のある人、梶文左工門は藩命により江戸に登つて蘭學を修め、幕末より明治初年にかけて、藩の公文書中にも所々散見する人物である。

即ち先生は江戸に於ても、鄕里に於ても斯くの如く相當の人傑と交友を厚うして居る事は、一面先生の人格識見の凡々ならざるを示して居るものと見て差支ない事と思ふ。

（五）先生の遺跡、遺品

（イ）先生の生地　　龜甲町の事は明らかな事ではあるが、其家宅址は不明である。これを今年九十余歲になる佐藤蔕翁（龜甲町に生る）八十九歲になる高杉健吉翁（春日町の人）に聞いて見たが何等記憶する處はない、古圖を探しても見當らない、又東長町の住宅址、土手町の住宅址も同樣色々探して見たが今知ることは出來ない、ただ赤格子の家と云ふので名高かつたとも傳へられて居るが、明治の初年ならば赤格子は今で云へば一種の廣告で、醫者の處では何軒もあつたと高杉翁が云ふて居る。元俊先生が赤格子を始めたので方々に流行するやうになつたものか、それは不明である。しかし先生最後の住宅地は明かである。そしてその建物も現存して居る、即ち本町一丁目七番地は其宅地で今弘前高等國民學校の敷地となつて居る、又其地にあつた建物は南隣八番地に移されて現存して居る、改造は加へられて居るが、今も大方の形骸を殘して居る、佐々木五三郎氏の談に據れば明治七年大火後大工堀江左吉の建築せるものであるとの事である、弘前西洋造の始めのものである、同氏も明治卅四年頃までこの家屋に住居して居たとの事である。

（ロ）臨終の地　　香遠先生傳記に據ると、先生は九十九森の地で永眠し且つ遺言に因つて其地に葬つたとあるか一說には本町一丁目の本宅に於てと云ふのもある、記者もこの點に迷ふて居たのであるか近日大山龍助氏に遇つて先生

の弟新藏宅で死んだ事を明にした、同氏は今なほ先生の亡くなつた頃の時候の狀況までも記憶して居る。

（八）最初の墓地　　九十九森の中の男山と云ふ小丘の下に神葬を以て葬つた、勝海舟筆の墓表もこゝに建てたのであるが、此の地に偕行社を建築するために明治四十一年凡てを茂森町寶泉院に移した、今何物も留めて居ない。

（ニ）現在の墓地　　寶泉院は佐々木代々の墓所である、先生の妻まさ子、實弟覺玄、同健三郎、同新藏並に先生の伯父元龍其孫佐々木元亨元亨の子佐々木文蔚の墓所も此の處にある。

（ホ）先生の眞影　　佐々木五三郎氏所有の一眞影はある、もと先生の嗣子に定まつた佐々木文美（もと金太郎）の所持せるもので若い時のものではあるが、何時何處で、如何なる因緣で寫したものかはわからない。

（ヘ）先生の所持品　　口繪に掲げた鏡と飾玉とは唯一の遺品である。なほ佐々木五三郎氏が本町一丁目の先生の舊宅に住居せし頃には數百冊の蘭書もあり、中には前述の蕃語象胥もあつたが、全く散佚して居る、多くの書類はあつたが皆屑屋に賣つてしまつたとの事である。

（ト）蘭學堂所藏品　　これはどうなつたものか散佚してわからない、今東奥義塾にある蘭書（拙著青森縣通史に挿入）も其一部であつたのではないかと思ふ、また先生が文久元年歸國の節、持ち歸つた窮理書全一冊よりホール、レーシング全壹冊迄十三部その中にケヲロキー三冊の一部ありの如きも、其片影たに見る事は出來ない。

（六）先生の風貌性格

（イ）先生の風貌　　挿繪にある眞影は先生何才の頃のものか判明しない、しかし若い時分のものであることは疑ひない、此の寫眞に據ると眉目秀麗とも言ひたい位だ、これを四十餘歲の女性の方に考へて貰つたが、寫眞ならば美男子の方だとの事だ、また五十餘歲の某婦人は奇麗な人だとは云はない、但しこの婦人は先生とは些少の血緣を持つてる人である。寫眞を原版から引伸した寫眞師某の話では、これ程原版は美しくはないと云ふて居る。但し岩川友太郎翁が

幼時に宿した思ひ出は次の如くである。

元俊先生初め五人の兄弟は共に體格魁偉容貌峻嚴で一見凡人に非ざるを表はして居る。

と、岩川翁の幼年時代は先生五十餘歳の頃と思ふ。又先生の晩年を年十一、二の少年の立場で見て居つた、大山龍助氏が今日（昭和十七年八十歳）の記憶では、色はあまり白くない、恐い顔だ、中肯であつて痩せても太つても居ない、聲は高い、グワラ〳〵だと云ふ事である。

（ロ）先生の性格　　先生は氣慨に富み、人を愛し、學ぶ所は稠密を要する醫學、舍密學等ではあつたが、友との交際には障壁を設けず、甚だ恬淡であつた樣に思ふ。

岩川友太郎翁の記述に

兄弟孰れも酒豪で、各職を異にするも醉へば常に天下の大事を語り互に議論を戰はし罵言讒謗の揚句は鐵拳を振り廻し狼籍に別るゝのが普通であつた、併し平素は情義厚く寒暑には必ず互に訪問し前日の口論は全く忘れたるものゝ如し

と評して居る、又翁が工藤健三郎の事を叙せる處に

明治維新に際し、函館府知事清水谷公考に使へ官軍として弘前に來り、兄弟久方振に報恩寺に相會して酒宴を張り互に一別以來の疎遠を詫び、無事を祝して睦じく語り合ひしが、醉の廻るに從ひやがて天下の大勢を論じ擲り合を始めたのを見て老生一驚を喫した。

と云ふのもある。

高山文堂翁が佐々木五三郎氏に語れる談に先生は常に他所から來た浪人共を五、六人世話してあつたとの事であるが前述せる仰松亭にて箱舘港の寫眞を示せる仁等も其類ではあるまいかと思ふ、他所から來た人のみならず、當地の人にも、先生の宅内に起臥し、其惠與に預れるもの少くない、木村繁四郎翁の少年時代の知己で、現に先生の家に厄介となつて居つて、腸チフスで死亡した人のあつたと云ふ事も、近日翁から聞いた處である。高山文堂翁が所持せられた新聞切拔（調査して見たら何新聞か解ることゝ思ふ或は大正報かとも思ふ）に明治初年藩にて招聘した靜岡藩儒宮崎立玄の元俊先生を評せる一文がある。即ち

予の弘前に遊ぶや始めて香遠佐々木國手と相逢ふ國手磊落疎岩修然として脫俗の概あり、予大に其人となりを喜び一見舊知の如く以て天涯の知己となす此篇襲に吾藩中村敬宇と同じく清人白笑韻を歩して作りし所なり國手亦曾て敬宇と相知れる故□其□書を請はるゝや錄して以て□祭に供す（原漢文）

庚□十二月　　靜岡宮崎

と、以上に據つて、其性格の大要を彷彿せしむる事を得るであらう、なほ宮崎の文は明治三年のものと推せらるる、□は活字が缺けて居る爲め不明の處である、庚□は庚午と思ふ。

五、先生に對する感謝と崇敬

（一）先生の立志苦學

先生の父秀庵は藩醫佐々木元龍の弟であるが、龜甲町に於て町醫開業の際は、餘り流行なかつた爲めに、母神女史は機織仕事をやりながら五人の子の養育に當つたと云ふ事である、即ち先生は貧困なる家庭の間に生ひ立つたのである。或は思ふに先生の後年に及ぶに從ひ益々顯著となつて來る强い意志力は先づ此の間に養はれ鍛へられたのではあるまいか。そして斯る境遇の間にも刻苦して父の手助けの出來るまでに修業を勵んだのであらう。此の間醫道は父より學んだとしても、其以外の學問は、どの程度に誰から授かつたかは今明かでない。

さて先生は江戸遊學を實行したのは年三十一歳の時である、前々よりの念願か、或は何等かの動機に因る突然の發奮かこれ又今知るべき資料はない、しかし佐々木五三郎氏の語る處に據れば、今までの醫術の習得だけではいけないと感じたからだとの事である、此事も當時の町醫の身分としては相當の見識であると云はねばならないのであるが、吾人の一層崇敬を厚うする點は、學に志す者としては三十一歳と云ふ晩年期に、勇躍東都に登つた事である。空想にも走り易い血氣溢るゝ青年時代ならば兎に角、多數の當時の人々は安逸をこれ求むる年頃となつて居るのに決然この學に出でたと云ふのは、並ならぬ決心と見なければならぬ、なほ又刺激の強い且つ頗繁な江戸の近國か、京畿の地方か、乃至は新來文化の輸入口である。九州地方ならば、或はとも思ふが、さういふ事からは常に遲れ勝の遠ざかり勝ちの、奥羽極北の津輕からと云ふ事を考へる場合、此の立志修業の決行と云ふ事は、誰れ人にても出來ることではなく、尋常の目的や少し許りの感興の下に生れたものではないと考へなければならない。加ふるに先生の家庭は、先生を遊學せしむるに充分豊かではない、先生が父君の手助けをしてからは前に比べて、些少裕福になつたかも知れないが、先生は苦學を覺悟して登つたものらしい、その譯は上京後間もなく學費に苦しんで居る、本文にも記した通り留守宅より仕送りの充分でないと云ふ事から、實弟工藤健三郎は其給扶持の幾分を割いて是を兄の學費に充てて居る、先生も亦寫本等してなほ幾分を補つて居る、杉田塾の修業期間中にも、斯くの如く貧困を凌いで苦學力行を續けたのである、吾人は先づ此の強固なる意志に敬服せざるを得ない。

次に先生は杉田塾を出てからもなほ研鑽を怠らない、江戸麻布町に開業してからも、神田孝平、柳川春三等とも相往來し其知見を廣めて居る、又蕃語象胥も此の間に出版して居るのである。麻布町に開業の身となつても少しも小成に安んじて居ないのである、斯くの如き態度は先生歸國後の諸活動にも充分現はれて居るのであるが、中にも抑松亭記に「於茲乎愈製練舍密之術得精成究理之學益開」とある文句は一層留意すべきである、又先生はひとり己が實驗場に精心す

ると云ふばかりでなく、當時の中央學者と連繫を保ち其新智識の吸收にも怠らなかつた消息は、彼の杉田玄端の書面の中にも躍如として居るのである、先生の斯る奮闘力は果して如何なる源泉より湧き出でたものであらうか、其立志の既に凡々ならざるものあると共に、強い意志力を以て、幾多の苦難に堪へ、遂に修學を遂げたる其鍛練の功に期すべきではなからうか。

（二）先生の二大功績

先生には數種の著述がある。しかし是等の著書が、先生の聲名を高からしめた以外、如何なる程度の裨益を世人に與へたものであるかは、簡單に是を計り難い。又維新前後に於て筒藥をつくつたり硝石を焚いたりした事は、確に其當時に於て大きな役目を果して居つた事は、從軍を止めさしてまでも、藩に於て是に從事せしめて居た事でもよくわかる。そして、諸種の舍密學の應用業は、九十九森の地に於て其後に於ても永續して居た事は、仰松亭記や大山龍助翁の實話からも伺ひ得る。又實弟新藏が諸種の企業を起して居る事も、同精三が石炭山に精心した事も、先生の誘導預つて力あるものとは思ふが、こゝには斷言を避けて置く。なほ又青森其他の公立病院の創設に盡力したと云ふ事、並に先生の弟子は其病院の醫員となつたと云ふ事も、決して埋沒してはならない大功績ではあるが、未だ其結果を充分にして居ない爲めに、今暫く預つて置きたい。しかし吾人が先生の二大功績として感謝措く能はざるものは何んとしても地方に西洋學を開いた事と、種痘の普及を計つた事である。

西洋學に就いては舊藩に於ても早くより留意し、前述せる如く安政六年從來の弘前學問所内の稽古館内に蘭學堂を設け、先生をして其教授たらしめた。岩川友太郎翁ほ大正九年九月の東奥日報紙上に、「五十年前に於ける舊津輕藩の洋學」と題する文中にも、其結びに「蘭學堂は全く此の人の爲に開かれたのである」と述べ、先生の功績の偉大なるを讃へて居る。藩日記等を見ても安政の此の頃になると、藩内にても蘭學熱は起りかけて居つて、藩費を以ての蘭學生派遣

等も行はれて居るのであるが、堂々たる藩の大學内に此の道の專門講座を創始して、地方に其發展を計つたと云ふ事は並々ならぬ事績であつたと見なければならぬ。なほそれのみならず、吾人の考としては、藩で學生を江戸に登せたりするやうな氣運を高めた事も、先生と無關係のものではないと思ふ事だ。香遼先生傳記にも、地方より上登する蘭學生は皆元俊先生の世話になつたと云ふ事も、其れに觸れる一消息でもあるし、藩より正式にしかも最初に蘭學兼勤を命ぜられたる兼松石居よりも、先生の學修業の方は寧ろ早いのであつて、この點よりも大に考へて見なければならんと思ふ。石居翁の先生を知つて、よく藩に取入つて呉れた事並に當局の關心なくしては、先生の力倆も此の處まであらはし得なかつたかも知れないが、兎に角西洋學を藩の領内に開いた祖であり、蘭學堂開設の功勞者であり。蘭學教授の實力を有した最初の人であると云ふ點に於て、大いに其功績を記念しなければならんことゝ思ふ。

かくて元俊先生に導かれた濟々たる多士も間もなく蘭學の衰頽と英學の勃興とに伴ひ、或る者は英學に轉じ、或る者は他の道に赴いたが、蘭學に於て理解せられた外國語の習得と、其間に受けたる直接間接の歐州文化の刺激が其人々の後來の爲に無意味のものでなかつた事は云ふまでもない。中にも先生の非常に愛した弟の子金太郎の如きは、其高弟であつた計りでなく、遂には先生の嗣子にも定められたのであるが、この人は津輕人のうち英語を習學せる人々、としては其魁をなせる一人である。金太郎は蘭學仕込の素養の下に明治二年青森に來て居つた箱舘脱走の捕虜林桃太郎（後ノ林董伯）を尋ねて英語を習つて居る。これは藩日記には一寸見えないが、同人と竹馬の友であつた岩川友太郎の言ふ處であつて充分信用が出來る。又ひとり金太郎のみには止らない。津輕藩人で英語を習ひ初めた人々は、多く蘭學を學んで居つたものから出て居る。明治二年に藩の洋學塾頭となつて英語の教授に當つて居る吉崎豐作の事は、未だ調査充分でないが、慶應元年英學修行を藩より命ぜられて居る佐藤彌六の如きは、元俊先生の自宅に起臥して、其教を受けて居つた親近の間柄である。なほ亦明治二年の秋頃には藩日記にある蘭學生澁谷權作の如く、英學專業を命ぜられて居る例も

ある。斯くして英學塾も興り、引いては本多庸一、珍田捨己、佐藤愛麿、陸實等を生んだ東奥義塾設立の遠因ともなつた事を思へば、先生の蘭學堂建設の功は蓋し偉大なるものと云はねばなるまい。

次に今一つの大功績は種痘の普及である。勿論地方に於ける種痘術の始まりは、先生を以つて始祖とするものではない。本文にも述べた通り。なほ附篇にも再述する通りである。しかしながら普及の實効を奏したのは先生の力である。津輕承昭公傳に據るに、元俊先生だけでも種痘を施したもの、二萬人にも及んだと云ふが、吾人はその數のみに限らない。醫術は仁術なりと云ふて、時には謝禮をも受取らず。在郷の如何なる處にも出張して倦むことなく、自宅に於ては妻女にまでも針を持たせて、種痘をさせたと云ふ程の熱心さは、人々を安心せしめ、感泣せしめて、種痘の恐るべきものにあらず。種痘は實に有効なるものだと納得せしめ、以て郡中全般に普及せしむるに至つたと言ふ大功績である。

由來世人は疱瘡の恐るべき事は知つて居るが、さりとて、種痘と云ふ事も甚だ危んで居たのみならず、又それを助長する迷信もあり、巫視の類で、またこれを妨害するものもあつたのである。先生の種痘普及に當つては、たゞ親切熱心と云ふだけでは間に合はない。是等の迷信者の妨害をも打破しなければならない。先生の知己兼松翁の一文はよく消息を示して居る。即ち明治七年五月青森縣支廳に呈出せる建言に

成言頓首白す。弘前本町一丁目住醫佐々木元俊なる者の話に頃百澤村近傍新法師村邊より絶て種痘に來らざる故之を探討せしに告者ありて、嚮に盲巫此邊へ來り、種痘は身體に害あるなどゝ妄言したるより、愚民等原來この盲巫を信ずる故種痘に來らざる也と、此盲巫をば既に禁ぜられたりと聞くに、今に徘徊する事と見えたり、此者種々の妄言誑語を吐き、甚民害をなす者にて先年養蠶は岩木山大に之を忌み給ふなどと唱へて、養蠶中廢したる事あり。又之に類する一種大平と唱へ或は御夢想と稱す。皆之妖鬼に托して邪言を唱ふる者也。又元俊の話に南方目谷の澤と云ふ地、中畑村の邊に生兒の多き者其半を擧げざるの弊風あり。土言おがへし申すと稱したり。原來本縣に兒を擧げざるの

風はなかりしに、先年秋田へ出張する者、久保田邊に此惡習あるに傳染し來り他に及ぼせしと云ふ、或は碇ケ關にも此事ありと云ふ。願くは前の件々大に政化を妨る者なれば、痛く御制禁これ有度なり。元俊曰身體を健康にせんと欲せば病害を醫せざるべからず。政治を敷かんとせば、妨害を除かざるべからず。此言確論なれば陳述する也

と記し、其次に元俊先生の此の間に於て種痘を施した勞苦と功績とを述べて

さて此佐々木元俊と云ふ醫は舊藩の比より本地に未だ種痘の開けざる時、甚だ勞苦周旋して施行し、信せざる者を論說し、之を敷き弘め漸く今日圖境に天然痘なきの姿に至り、幾萬の生兒を全治せる事は頗る仁術中の大仁術と云ふべし。今既に疾に罹り殆ど危篤に到れり、願くは至急其功の賞典に預らば末路の洪福なるべし。成言に於ても偏に賀ふ處也。成言頓首

明治七年五月

弘前上鞘師町士族　兼松成言

と結んで居るのである。即ち官廳に對して賞典を請ふて居るのである、右の二大功績の賞讃については岩川翁と兼松翁との文に盡きて居る。是れ以上敢て記者の贅言を要せぬ事と思ふ。

（三）先生の奉公精神

「酒を汲んでは天下を論ず」底の事は、或は其時代に於ける青年界の一面の風潮であつたかとも思はれる。しかし親しき兄弟の間柄にも、時に鐵拳亂舞に至ると云ふ程の熱を伴ふものは、餘り多くあるまい。しかも先生並に其兄弟の凡ては、たゞ大言壯語をのみ弄して一生を終へて居る者は一人もない。皆夫々の技倆を發揮し世の爲に働いて居る。岩川翁も「兄弟同志の談話を聽いて、おぼろながら當時の天下の大勢なるものを察し、知らず識らず讀書以外の薫陶を受けた」と記して居る如く、論ずる處は天下國家の爲めで、單なる利慾や感情の問題ではない。斯る酒席の口論が謹嚴なる

岩川翁の少年時代を少しも誤らしめて居ない點からも、大に玩味して見なければならない。

先生が江戸上登前の半生の行動は前述せる如く殆んど全く不明である。しかし後半世の知られたる範圍の凡ての行動は、天下を論ずる人として少しも矛盾する所はない。先生未だ歸國せざる前、佐久間象山先生の事に坐して訊問を受けたと云ふ。何の事かは不明であるが、或はそれに坐するたけの一角のものがあつたのかも知れない、また天下の一方に名を成せる柳川春三、神田孝平等と親交あるの點ば、それ等の人々と交際するたけの識見を相互にもつて居たものと解せざるを得ない。歸國後往來せし西舘、楠美、兼松、平井、木村、杉山、今、手塚等の人々は藩一流の學者又は政治家である。交友の上よりも先生の當時人傑として認めらて居つた有樣は充分察知することが出來る。又先生が蘭學堂の設立や、種痘の普及や、其他の諸事績に現はれたる數々を見るに實に身を挺して働いて居る。蘭學堂にも歸國後餘りの休息を取らずに直に出勤して居る。種痘に際しても公の種痘舘のみならず自宅に於てもこれを施行し、又在々にも倦むことなく廻郷して居る。剩へ一方頑固な迷信の打破に勉めながら、郡中普及の奏功を念願して居る。貧しきものよりは藥料を貪らず、醫は仁術なりと云ふ語を實際に行つて居たのである。亦江戸に於ては上登せる蘭學生を世話し、歸國後に於ても內門弟は勿論、他國よりの食客までも其家に住まはせて面倒を見て居た。人に奉する事の厚く、己が利慾に恬淡たる事目前に躍如たるものがある。

次に斯る心情の事は兎に角とするも、現に實効を示して居た諸事業を見ても、蘭學堂や種痘舘の設立は勿論、公立病院に於ても、硝石の焚出に於ても、其他の種々化學的研究に於ても、悉く人生の爲めに、公共の爲めに有益なもののみである。しかも先生は斯る事業に對しては常に研究的な態度を持しながら、積極的に勇敢に實行にも取り懸つて居る。藩日記の隨所に示されて居る先生の建議（申出）の狀況を通讀しても、よく其消息を伺ひ得るのである。

終に臨んでなほ一言を附したい事は、先生は歸國前審書調所出役を慫慂せられながら、藩命もたし難く、遂に歸國し

た後のその御態度である。藩の公務の爲めに、藩民の公益の爲めに、日夜辛苦し殆んど寧日がない。書面を以て中央學界の景況を尋ね。圖書を求めて研鑽を勵んでは居るが、孜々として津輕の小天地に日々の仕事を愛して居た。貳教（註五）たりし工藤岩司は間もなく藩の待遇に不滿を抱き脱藩して江戸に赴き、木村和一は同じく脱藩して京都に去つたと聞いて居る。先生は藩命に從順に、且つ己が職責に對して眞面目に且つ熱心であつた。實に先生は天下に知らるべき才能を有し、世人よりも其期待を受けなから、敢て再び登雲の夢を貪らず。仲び行く友人知己の聲名にも憧れず、鄉里弘前の地に於て、勿々として其天職を盡した。而して明治七年五十七歳を一期として、遙かに九十九森の松嶺を聞きつゝ靜かに眠つたのである。まことにゆかしくも尊き生涯であつたと云はねばならない。

註五＝貳教は稽古館の職名

附錄篇

第一　津輕藩洋學の濫觴
第二　津輕藩種痘の起原
第三　補遺並に雜記

附錄第一　津輕藩洋學の濫觴

幕府に於ては享保五年洋學解禁の令を發し、青木昆陽を長崎に遣はして蘭語を學ばしめた。而して昆陽は和蘭語譯、和蘭文字略考等を著して、本邦に於ける蘭學の起原を作つた事は人皆周知の處である。次に安永三年の杉田玄白、前野良澤、桂川甫周の合著に成る解體新書、天明八年の大槻玄澤の蘭學階梯、寛政八年の稲村三伯の東西韻會（通稱ハルマ和解）の發行、文化八年の飜譯局の設置、文化十三年の和蘭カピタン、ヘンテリキ、ヅーフと通辭吉雄權之輔等との合著に成る和蘭辭書（通稱ヅーフ、ハルマ）の出版等により、蘭學の習得漸次困難を減するに至つた。次いで文政九年青地林宗の氣海觀瀾の飜譯。天保十年宇田川榕庵の舍密開宗の著述等に因つて、オランダ醫學に加ふるに理學に關する研究熱をも高むるに至つた。しかし津輕藩に於ては、斯る中央學界の推移の間に於いて、特別其影響と認むべきものを示して居ない。恐らく藩の上下共に未た無關心であつたのではあるまいか。

さて嘉永元年佐々木元俊江戸に登り同二年には杉田成卿の門に入つて居る。嘉永元年到着直後入門したものかも知れないが、確證がない。又兼松三郎は嘉永三年蘭學兼修を命ぜられて居る。兼松三郎が杉田成卿と其以前より往來し西洋の事情等を聞き蘭學の必要を痛感して居たと云ふ事は兎に角として、正式に蘭學の修學を始めた最初の津輕人としては佐々木元俊を推さなくてはならない。

次いで藩命により蘭學修得の爲めに幾人かの人々は上登した。工藤岩司、百川文作等前述せる如くであるが、文久二年佐々木元俊の蘭學堂を開くや、其中の幾人かは歸國を命ぜられ元俊の助手と成つて居る。即ち津輕藩洋學の濫觴をなすものは先づオランダ學で、文久二年蘭學堂の蘭學教授に始まると云はねばならない。而して藩をして此の擧あるに至らしめたのは、安政元年日米和親條約の締結に伴ひ蘭學熱の全國的に彌漫するに至りし環境にも由るべきであらうが、嘉

永前後既に當時の蘭學大家杉田成卿と往來せし兼松石居、の藩侯に說得せしことあることを忘れてはならない。

乍去津輕藩に於いては蘭學修學熱の盛んなりし時期は甚だ短かつた。もう明治二年頃になると蘭學堂教授の景況は傳はつて居ない。元俊は醫學館には出入して居るが、醫術の方が主であつたらしい。明治二年津輕直記舊邸を學舍とし西洋學を開いた時は英學は主で、中に蘭學生三人交つて居つたに過きない。明治二年七月十三日の藩日記に

直記殿宅に而英學寮差立學生十五人寄宿味噌より蚊屋迄渡方並米錢頂載申出沙汰有之事

但右之內銃隊面々は銃之隊御免之事

外に蘭學生三人有之

然るにこの蘭學生も、其年のうちに英學に變つて居る。

明治二年十月十二日藩日記に

一、澁谷權作直記殿舊宅におゐて蘭學稽古之處英學專業事

とある。未だ充分の調査を了へて居ないが、或は思ふに此の時頃蘭學堂の蘭學教授は廢絕となつたのではあるまいか。

さて藩に於いて英學に關心を拂ひ出したのも維新前數年前からである。津輕に於いて津輕人が英語を修了したのは前述の如く、明治二年は始めであるが、津輕人は外に出て學んで居るのは、なほそれよりも古いのである。即ち吉崎豊作とか、佐藤彌六とかは藩命によつて慶應元年既に英語を學んで居る。同年正月廿三日の藩日記に、

一、吉崎豊作申出候入塾謝金頂載之申出ニ付穿鑿之處昨年迄於箱舘武田斐三郎殿江罷越測量兼學之處同人江戸表江引越シ旨ニ御座候間新ニ入塾之廉ヲ以謝禮金差出不申候而茂可然樣奉存候間時候見舞並以來御世話相成候趣ヲ以申述金三歩差贈候樣福澤英喜方江ハ外ニ御振合之通入塾金二兩被下方被仰付候樣附紙之通

とあり。福澤塾に入つた模樣である。此の事は津輕承昭公傳に吉崎豊作を福澤塾に送つたと云ふ記事とも一致する。武

田斐三郎は蘭學者（後英佛學をも修む）で箱館諸術調所の教授である。和蘭藥造書一冊を便りに五稜廓や辨天臺場をつくり、文久年中には新造の龜田丸に乘り込んで黑龍江に航海したと云ふ人である。吉崎豐作も蘭學系統から英學に轉したものと見てよからう。又同年閏五月十一日の藩日記に

一、勘定奉行申出候神市右衛門弟辰太兵學稽古のため箱館表江渡海名村五八郎方に入塾之上稽古罷在候處同人儀出府に相成候間御物入稽古登江戸詰合申渡物之儀を外並合通り被下方儀は並佐藤綱五郎方弟彌六儀蘭學並測量術勤學登願出（中略）佐藤彌六儀英學修行いたし候樣其外申出之通

とあつて、佐藤彌六は確に蘭學から英學に轉學を命ぜられて居るのである。吉崎豐作と佐々木元俊との關係は不明であるが、佐藤彌六は元俊の門下生である。

さて慶應義塾が江戸の新錢座に開かれたのは慶應三年で其以前の福澤塾が江戸鐵砲洲にあつて中津藩の藩士を主として教授して居たのであるが、吉崎入塾のこの邊の消息は明かでない。そして吉崎は何時歸國したのかも記者の調査は未だ充分でない。しかし明治二年七月十二日の藩日記には、洋學塾頭を命ぜられて居る事が記されて居る。又岩川翁の記述に據れば、佐々木元俊の嗣子と定められた佐々木金太郎は、青森に來て居つた箱館の捕虜林桃太郎から英語を學んで居る。これは何月の事かわからない。岩川翁は林萱伯と書いて居るが、此の時實際には桃太郎と云ふた思ふ。當時二十歳足らずの青年であつたが、英語がうまいと云ふので、地方では當時大變な評判であつたらしい。林は慶應二月幕府より英國に派遣せられた留學生の一人で維新の谷革を聞き業半にして明治元年六月下旬横濱に歸着し、次いで榎本軍に參加したのである。處で又藩日記を讀んで行くと、御預人即ち箱館の捕虜から英語を習つてる人は他にもある。二年九月十九日の條に

青森表罷在候御預人塾內英學生工藤勇作、青山伴藏、三浦良太郎罷越英學稽古之儀之事

とあり、佐々木金太郎の事は、さつと見ただけではあらはれて居ない。しかし工藤勇作等はたとへ捕虜より習づたとしても吉崎豐作英學塾を開業の後である。英學生と云ふ言葉もそれを裏書するやうにも思ふ。また工藤等の習つたのは林桃太郎かどうかはわからない。米人エドウキン、ダンと云ふ人（北海道開拓使で雇入れた米人）（註六）の後年の話に脫走の將校連には英語の上手な人は何人も居つたと云ふて居る。しかし佐々木金太郎と、吉崎豐作と、どつちが先きに津輕人として、津輕の地で英語を諜告り出したかは問題である。

しかし津輕藩に最初に英學塾を興したのは吉崎の力である。岩川友太郎翁は

舊藩時代の洋學を物語らんとするに臨み、先覺者として忘るへからさる人は、佐々木元俊の外に今一人吉崎豐作である氏は明治初年函館より歸藩して頻りに將來英學の必要を唱へ、當局に獻言して給費制を設け津輕直記の舊邸に塾舍を開き之を直記樣の塾と稱した。是は明治三年の夏で老生も同氏の勸誘に依り海軍局より此方へ轉學した。

といひ、なほ翁はこの英學塾と別途に沿革して來た漢學塾と共に、改組せられたものは、東奧義塾であると云はれて居るが、東奧義塾創立の形式からは兎に角、其設立の氣運上には、過去の洋學の沿革と一脈相通ずるものかあると見なければならまい。換言すれば東奧義塾が率先して西洋學術を取り入れたと云ふ基礎には、藩に於て蘭學、英學を興し西洋文物の輸入に重きを置いた餘勢の然らしむる處と云ふて差支ないのである。

なほ序を以て附記せんに、藩にては明治二年佛學を興さんと計畫し、其教師等も任命して居る。藩日記明治二年十一月廿四日に

一、矢島甚四郎於學校法朗學開業被仰付未不熟兩三年御猶豫願之事

同日記十二月　日に

一、矢島甚四郎佛學教授表方御勤行之事

等見ゆるか。これは英語の如く盛んにならなかつた樣である。又明治三年の藩の公簿に魯學御開きの議云々の事等も見えて居る。是等に就いてはなほ今後調査を繼續する積りである。

註六＝エドウキン、ダンの話、この人の北海道開拓使に雇はれて居た事は前々から知つて居たのであるが、この話は昨年函館圖書館でふと近江の彦根で發行して居る「太湖」と云ふ雜誌を瞥見の折知り得たものである。

附錄第二　津輕藩種痘の起原

津輕藩領種痘の始まりは何時か。而してそれは蝦夷島方面よりの系統のものか。長崎よりの系統のものかと云ふ事は地方種痘史上の興味ある一問題である。

由來文化九年國後に歸還した中川五郎次は文政年間天然痘流行の際、魯國より齎らせる種痘法を施して、夥多の人を救ふて居る。而して箱館の醫師白鳥雄藏は五郎次に學び、秋田に至つて、同地の醫師に傳授し、其醫師等はまた藩命を受けて、其領內に種痘を施して居る。卽ち五郎次の種痘を習得して本國に歸つたのは、ジエンナーが種痘の有効を證した西紀一七九六年を去る僅に十七年の後で蝦夷島に於て實施したのは、其後十數年位のもの、これが本邦に於ての種痘の嚆矢である。

然るに嘉永二年（或は天保の末とも云ふ）蘭人の長崎に傳へたる種痘術は、漸次傳播して松前にも傳はつた。松前藩醫櫻井小膳が和蘭種痘術を施したと傳へられて居る。安政四年蝦夷地に疱瘡の大流行を極めた時箱館奉行は桑田立齊を江戸より下して東蝦夷地に種痘せしめ、深瀨洋春（箱館の醫師にして江戸に學ぶ）をして西蝦夷地を巡回せしめ、爾後大に減じたと傳へられて居る。これは完全に長崎系統のものである。

さて小山內日記を見ると、

五、七年以前より御國表に而も植疱瘡と申義流行いたし醫者にて小兒共未だ疱瘡不疾者へうゑ申候事に付程能出候而流行に而疾候と違ひ危き事無之由專ら相行はれ申候秋田よりも醫者參りて弘前に而類合之面々に施し候に手細無之時年の春松前に而江戸表より御下之醫者三厩表逗留中海岸通り之者類合植疱瘡いたし候事但此法は御國表御番醫之內にも近年傳授を傳候て植候人も有之候乍去習熟せざれば植候而も疱瘡に相成申者も有之由に候

の如く書いて居るが、右文中の當年を安政四年とすれば、その五、七年前は嘉永五、六年乃至同四年あたりと見るべきか。さすれば此頃より津輕に於て植疱瘡が流行したと云ふ事となる。これは國の醫者かどうかははつきりしないが、中に秋田の醫者も交つて居る事を注目したい。しかしそれだからとて津輕に傳つた最初の物は北方より來た種痘術だとの斷言も避けなければならぬ。その方ではないかとの疑たけを存じて置く。また御國表御番醫の內で近年傳授を得たと云ふ人々の系統も從つて不明である。但し佐々木元俊歸國前既にこの道を以て知られて居た唐牛昌考等を指して云ふのであれば、長崎系統の和蘭種痘術であると云ひ得るであらう、さて以上に止めて大方の今後の御示教を待つ事とする。

附錄第三　補遺並に雜記

（一）材料に就いて

蘭學者佐々木元俊に就いては昨年出版した青森縣通史編纂の際にも、些少の調査を試みたのではあるが、主として先輩のものした津輕舊記傳類や弘前市史材料中に取入れられた舊記抄や、外崎覺氏の津輕承昭公傳、森林助氏著の兼松石居先生傳並に二、三の傳聞に據つたたけで、別に深入りはしなかつたのであるが、甚だ小篇ながらも、こゝに單行物として公表するとしては材料まことに貧弱僅少である。さりとて大體の出版期日もある事とて、多方面に亘り長時日を費すことも出來ない。春三月以來ボツ〳〵詮索にかゝり、夏七月までに入手し得た主なるものは次の如くである。

先づ文献としては

一、香遠先生傳記　佐々木五三郎氏蔵

佐藤彌六翁（元俊の弟子）の記錄に基き太田某氏の編纂せるもの

一、五十年前に於ける舊津輕藩の洋學（東奥日報社蔵）

東京女子高等師範學校教授故岩川友太郎翁の大正九年九月の東奥日報紙上に寄書せるもの

一、新聞切抜中に加筆せる文堂翁の手記（高山松堂氏の著者に寄贈せるもの）

新聞記事は香遠先生傳記と大同小異なるも、文堂先生が書添へたる元俊先生の友人並に門人の姓名は貴重なり

一、藩日記（津輕伯爵家所蔵弘前圖書館保管）

嘉永年間より明治初年に亘る約百七、八十冊を概見す

一、寶泉院過去帳　寶泉院所蔵

寶泉院は佐々木家一族の菩提寺なり

一、仰松亭記　佐々木五三郎氏蔵

一、杉田玄端書簡　同上

一、香遠先生墓銘　寶泉院

等の數種、又聞書としては

一、佐々木五三郎氏（弘前在住）

元俊先生の甥（先生の弟新蔵氏の子）に當り現弘前孤兒院主である。同氏が古老より聞き取れる先生の數々の逸話がある。

一、中田みよ子女史（弘前在住）

今年八十六歳、陸實翁の生家たる中田家の本家、中田家に楠美家より入嫁せる方である。元俊先生を見知れるは勿論其えらい人であつたと云ふ點をよく知つて居るが委しい事の記憶はない。

一、田名部の佐々木家（下北郡田名部在住）

同家は元俊先生の後嗣となれる佐々木金太郎（後信美）の父玄貞翁の家である。現主婦の方は元俊先生の助手を勤めてゐた玄貞翁の妻から色々の事を聞いて居る。

一、大山龍助氏（青森在住）

今年八十歳陸實翁の實弟である。元俊先生瞑目の時の事はよく知つて居られる。永眠の地は先生の弟新蔵氏（五三郎氏の父）の宅であつた事は、この仁によつて確めたのである。

一、木村繁四郎氏（東京在住）

元俊先生の居宅の事と、當時厄介になつて居た百川某の事を知つて居る。

一、佐々木和策氏（東京在住）

先生の父秀庵の兄元龍の後裔で佐々木家の系圖について承はつた。元俊先生の事はあまり知つて居ない。

一、和田信二郎氏（東京在住）

文部省在勤の方で、もと面識のない方であるが、某氏の御紹介により書面をも往復し、御面謁にも預ることが出來た。元俊先生の公刊せる「蕃語象胥」に就いて委しく知る事の出來たのは全く此の方が數ケ月に亘つて苦心して尋ね究てて呉れた御蔭である。本文には一々載せては居ないが江戸杉田家の系譜の精確なものを知り得たのもまた同氏の賜物である。

一、笹森嘉吉氏（滿洲新京在住）

元俊先生の門人土岐八郎の甥に當り叔父を通じて先生の逸話を所有して居る。

なほ文獻並に聞書に亘り、弘前の岩見氏、青森の佐藤茀氏同種市有隣氏、弘前の高杉健吉氏（八十九歳）等にも尋ねて見たが、特別のものがない。又青森の南家、弘前の松井家、伊東家、小野家等にも少しは當つたのであるがこれも同樣である。佐藤彌六の息女にあたる人をも考へて居たのであるが、一ヶ月ばかり前横須賀の方に移轉したと云ふので、一寸の間には合はない。小山内元洋の後裔や、元俊先生と關係深い杉田家、神田家、柳川家等について尋ねて見たいのであるが、これも後日に讓らざるを得ない。

（二）仰松亭記外數資料

一、仰松亭記

兼松石居翁が、佐々木國手の爲めに作れる仰松亭記は、今軸物となつて、佐々木五三郎氏所藏して居られる。

「香遠佐國手骨造舍觀密精煉場於富田廢苑之址此係先君上仙公遊覽之所有故廢焉頃香遠復構一亭於其側亭之簾端恰有一松樹々亦先公之遺物也因名其亭曰仰松徵記干予々乃日夫仰松若非仰其松之謂也仰先公之遺恩耳

蓋先公我藩中興之賢主而其德澤被我闔境者今母論也暫就亭之所屬目而

言△（　）之則環亭之古木宿草殘山之倚伏剩水之陰顯及鳥虫之欣聲哀音至干朝霞

暮靄風花々朗日雲月之靜夜凡興壞之所觸悉莫有非之公々遺睨者矣然而

香遠坐此亭喫茶傾酒徐消受此清福宜矣依仰此松以仰先公之遺恩遂名亭

豈△（　）不可緩△鳴呼香遠之用意豈淺△（　）乎雖然從仰之無以報其恩則猶有名而無實也香遠

於玆乎愈製錬舍密之術得精成究理之學益開則使我闔境之後進發末發之新知而於先公遺恩萬分之一庶幾乎有亦報也香遠

其思之哉　庚午仲夏晩甘醉翁成言於錄仰松亭

所々破れて、文字の全く缺けた處もある。右は佐々木五三郎氏の完全なる時の記憶をも交へて判讀したもので△を附せるは特に疑を有するものである。

一、先生の藥種店に就いて

先生は明治になつてから藥種業をも營んだ。佐々木五三郎氏の談に據ると、廢藩後始めたと云ふ事である。勿論店頭に出て居る譯ではなく、業務は家族主に弟精三氏が當つて居た。つまり經營者として見るべきであらう。其頃本町一丁目には五軒の藥屋即ちコグヤ、カナヤ、ヒノヤ（羽場）、タケヤ（永井）赤格子（佐々木）と軒を並べて居り壯觀なものであつたが、明治七年の大火で悉く燒失した。口繪に示した西洋造も其燒跡にやはり藥種業經營を目的に建築したもので、先生沒後は弟新藏氏の長男元四郎氏は明治廿四年頃まで營業を續け、其後は元四郎氏の弟五三郎氏が、此の家に居住して居たものである。

さて先生が斯る方面にも着眼し、其營業を行ふに就いては、どんな動機に因つたのであるか、また仕入其他の經營振りに於て、特別目立つたものはあつたか、今の處何等これに關する資料を得て居ない、中央の斯學者とも交際廣く、醫學藥學の新智識を、洋書と實驗とに據つて、日々怠りなく獲得して居つた先生の事であるから、一般の藥種商に比しては何等か新軌軸のものがあつたのではないかと思ふのであるけれども、今何とも云ふ事は出來ない。

一、箱館戰役時の一奉公

先生は箱館戰役時には、軍醫として第一線には出 です、主に火藥等の製造に就事して居た事は前述したが、最近こんな資料をも發見した。即ち藥品と醫療器具とを提供した事である。

覺

一、鹽　酸　十五兩
一、礦　砂　精　五兩
一、三十五度アルコール　壹斤
一、厘　秤　壹挺

右八點之藥種機械等弘前藥種店中拂底ニ付醫師佐々木元俊ヨリ爲納候直段相調候處藥舖賣買處之金七兩貳分ニ當リ候間此分御廻し相成度樣致度候　以上

十一日　藥店掛リ

勘定御掛中

右は箱館府の書類（現北海道廳所藏）にあるもで、拙著北海道史要著述の際、蒐錄したノートの中から得たものである

一、今幹齊翁の詩

今敬一（幹齊）翁は先生とは親しい友の一人であつた。先生を慕ふて次の一詩を賦して居る。

醫眼見機卅歲前　夙於洋學着先鞭
草枯木落思當日　和淚空呈追悼篇

右の詩篇は今佐々木五三郎氏所藏して居られる。

一、土岐八郎翁の談話

故土岐八郎翁は元俊先生の弟子である。著書はこの方の名を聞いて居たが、親しく御目に懸つた事はない。翁の甥に當る笹森嘉吉氏の語る處であるが、叔父は元俊先生の氣字の大きい事を語り、自分の宅に澤山の書生を養つて居たが米等は家老等に話してどん〳〵貰つて來たとの事、又九十九森も其筆法で無償で貰つたものであるとの事である。こ

一、ホフマン　十五兩
一、九十度アルコール　十兩
一、加　密　列　貳斤
一、乳　鉢　二つ

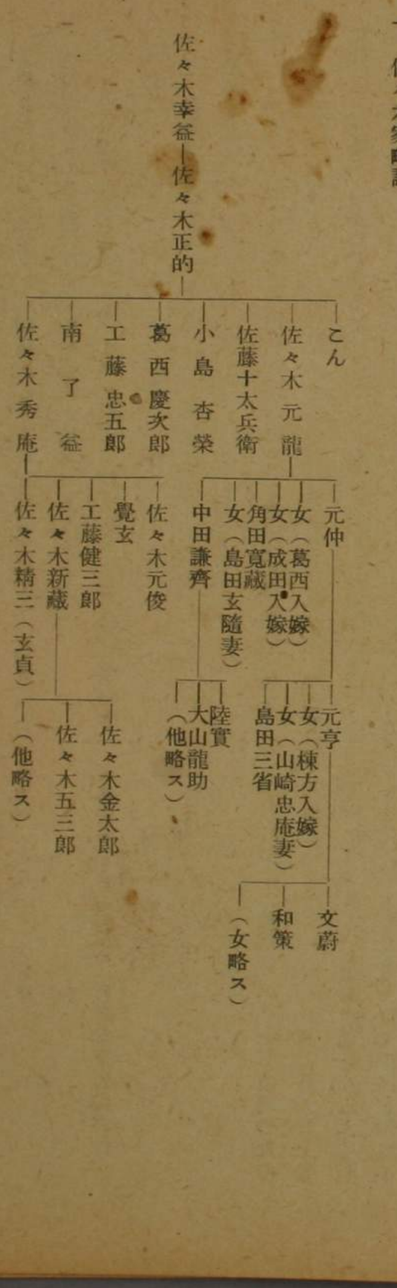
の事は先生の性格の條に取り入るべきものとも思ふが、本文作製後八月滿洲に遊び、新京に於て笹森翁より緣深くも偶々承つたものであるから、此處に事別けて記載する事にした。

一、大山龍助翁の述懷

元俊先生は實に世に惜しまれた人である。先生の事を幽かに知つて居る人々でも、先生のえらかつたと云ふ事を物語つて居る。中にも先生の從兄弟たる中田兼齋の子大山龍助翁は、今もなほ先生の早世を殘念がつて居る位だ、此度大山翁を訪ねた折、翁は陸羯南翁の少年の頃、先生は實氏をミノコ〳〵（巳之太郎なるが故）と云ふて可愛がつて居つたと云ふこと等も口すさみながら、先生の溫情と力量とを追慕して居た。

過ぐる日佐々木五三郎氏と殆んど一日懸りで翁を訪問し、漸く伺ひ得た處の一逸話である。

一、佐々木家略譜



附記＝右は主として佐々木和策氏と佐々木五三郎氏の教示に據り作製したものである。

一、佐々木幸益の先祖家は青森の故佐々木延身の家なりと聞く。

一、佐々木元俊の相續者は弟の佐々木玄貞より佐々木金太郎と家名を繼ぎ、現在佐々木吉三郎氏（青森縣田名部在住）の代になつて居る。

（三）編纂過程と希望

一、編纂の過程

本書は今春三月以降小閑を利用しながら材料の蒐集と其調査とを計り、五、六月にかけて起草を試み七月略纒つたのであるが、系圖其他二、三の點に於て是非確實を欲する必要上、書面等にて問ひ合せをなす一方、八月より九月上旬に亘り、滿洲方面旅行の爲めに遲延して、遂に九月中旬に漸く脱稿することを得たのである。勿論脱稿とは云ふものの、序文にも申せし如く甚だ不完全なものである、傳記として最も必要と思ふ先生の幼年時代も、青年時代も皆目不明であるばかりでなく、江戸學習時の勉强振りや其他の事の委しい事の何ものもわからない。又内助の關係を見るべき妻の方面の史料も殆んどない。田名部の佐々木家（先生の妻の死亡せし家）の主婦の方の語る處によれば、先生との間柄は所謂琴瑟相和する方からは其反對らしかつた口吻でもあるけれども、今は何もつきとむべき確證はない、東京主に地方の有識者との關係も譯山あつた點だけは知られて居るが、先生との關係文書を其家々に藏して居るや否やの事も全く調べて居ない。特に必要な先生の直筆になるものは目下一點たりとも得て居ないのである。斯る程度の處で、此の度は擱筆する次第である。

二、今後の希望

先生の人格識見並に地方に盡せる大功績を世に紹介せんと努めながら、以上の如き未熟の小篇に止めた事は、實に申

譯のない事ではあるが、目下の處時間や其他の關係から出版の期限をも考慮に入れる場合、これ以上の調査を進むることは困難である。澤山の方々から色々の御教示を賜はり、中にも佐々木五三郎氏よりは貴重なる材料と多大の御勞力とを惠まれ、且つ著作費用の一部の御寄贈までも戴いたのであるが、結果に於いて斯くの如しで、甚だ相濟まないと考へて居る。今はこれも稿本のつもりで一先づ發表し、漸次研鑽をつゞけて行きたいと考へて居る。

なほ終りに臨んで一言を附したい。來る昭和十八年は調度先生の七十年忌に當るのであるが、此期に際し先生に對する感謝祭を催しては如何と思ふ、而して此點は地方の醫學界及ひ藥學界並に教育教化に關係ある方々に特に御留意を切望する次第である。

（了）

昭和十八年三月五日印刷
昭和十八年三月八日發行

弘前市新寺町三十九
編纂者　相木司良

弘前市新寺町三十九
發行者　相木司良

八戸市番町五
印刷者　堀内年雄

郷土叢書　第六輯
佐々木元俊先生

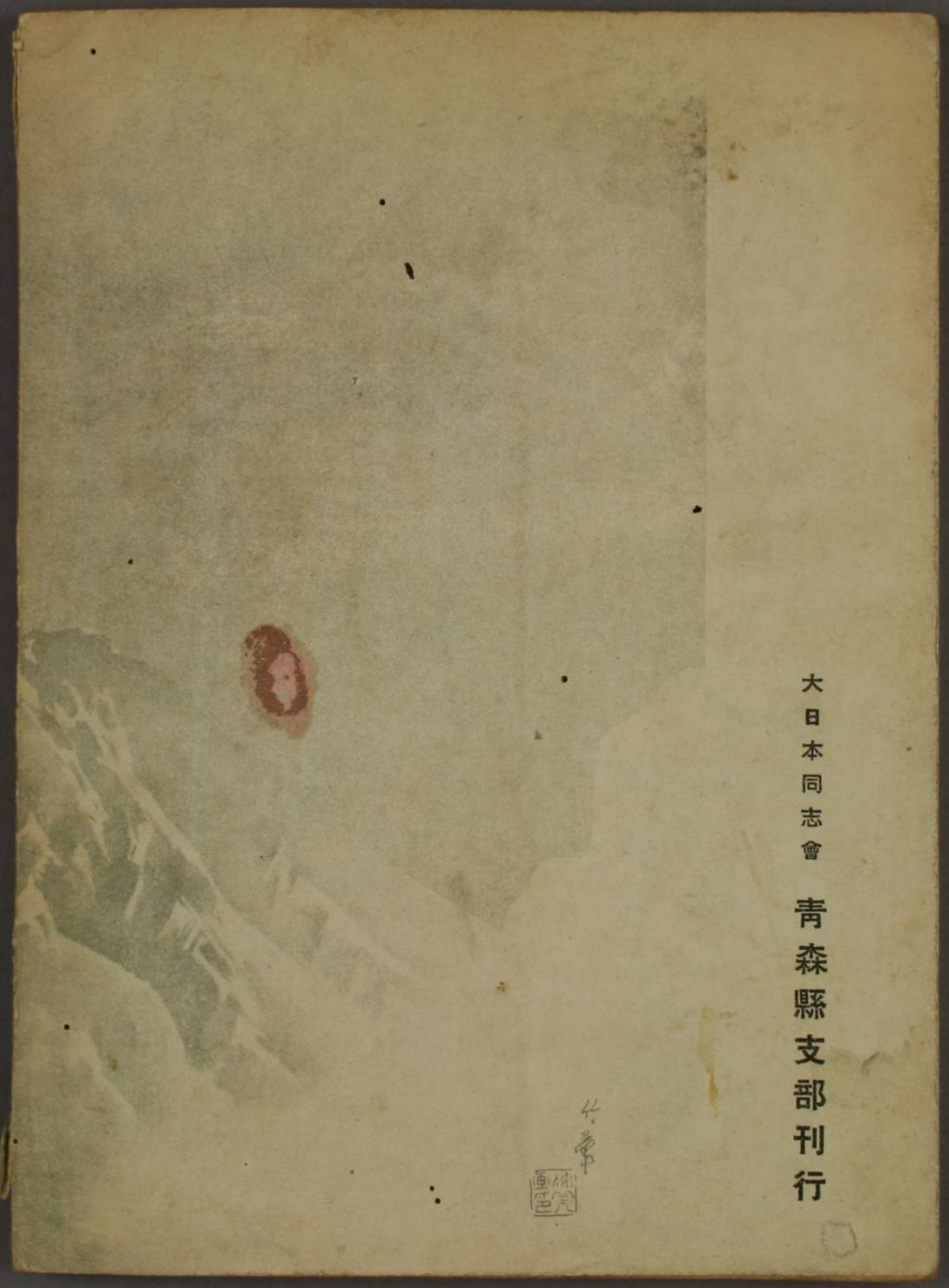
（停）定價　五拾錢

發行所
弘前市品川町十九
大日本同志會　青森縣支部
電話二七三番

[illegible]
[illegible]様

千里村
旅の森
紫雲の台

千年狼毒鶯の巣



大日本同志會
青森縣支部刊行